

日本家政学会
被服構成学部会誌

第40号
40周年記念特集

平成31年3月

目 次

ごあいさつ	1
平成 30 年度 被服構成学協会 総会	2
被服構成学協会 40 周年記念特集	
被服構成学協会活動の 40 年	3
元部会長からのメッセージ	9
平成 30 年度 被服構成学協会 夏期セミナー（創立 40 周年記念）	
プログラム	16
基調講演「デジタルフィッティングとアパレル EC を支える国際標準化の動向 ～ ISOTC133, IEEE3D Body Process Standard ～」	17
講演 1 「衣服サイズの国際標準化」	18
部会報告「日本人の体形変化（2014～2016 人体計測データ）」	19
記念講演「身体計測と被服構成学」	20
講演 2 「婦人服向け裁断用ボディ開発の変遷 フォルムとサイズから考察する」	21
講演 3 「3D ボディスキャナと 3D 技術を活用したアパレル設計プロセス」	22
見学 「計測ラボ（三次元計測）」	23
夏期セミナーに参加して	24
若手研究者研究紹介	
「三次元計測データを用いた研究の取り組み —高齢者の体型、動作および異体型の分析—」	25
第 19 回 全国中学生創造ものづくり教育フェア 報告	27
平成 30 年度 研究動向（修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題）	28
会務報告	29
平成 29 年度 被服構成学協会 収支計算書	31
貸借対照表・監査報告書	32
平成 30 年度 被服構成学協会 収支予算書	33
お知らせ	34
2019 年度 夏期セミナー予告	35
被服構成学協会 規約	36
被服構成学協会 申し合わせ	38
平成 30・31 年度役員	39
入会申込書および変更届、退会届	40

ごあいさつ

一般社団法人 日本家政学会被服構成学部会
部会長 川端 博子（埼玉大学）

平成の最後を迎える年となりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

平成30年度、各地では、洪水、台風、地震の自然災害が多く発生し、被災された方々にお見舞いを申し上げます。大自然に呑み込まれる人間の微力さを感じましたが、明るい話題として、将棋の藤井聡太さん、オセロゲームの福地啓介さん、フィギュアスケートの紀平梨花さんなどの若手の活躍があり、本庶佑先生のノーベル生理学・医学賞受賞によって、日本の学術水準の高さを認識することもできました。

私は、大塚美智子先生よりバトンを受け継いで部会長を1年間務めました。大塚先生には家政学会会長のお立場で、また、監事として引き続き部会の活動をけん引いただいております。副部会長はじめとする運営委員の先生方と先輩の先生方にアドバイスをいただきながら、部会員のみなさまの協力のもと初年度の役目を終えられること感謝しております。

今年度は創立40周年の節目の年でした。大塚先生を代表とする2013年度科学研究費基盤研究(A)「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」の採択により、部会員が協力して2014年～2016年の間に約3,200名の人体計測値を得ることができました。夏期セミナーは、文化学園大学・渡部千子副部会長に実行委員長と会場をお願いし、「ファッションビジネス戦略における身体サイズと衣料サイズの最新動向」の内容で開催致しました。外部講師の先生よりデジタルフィッティングや衣服サイズの国際標準化などについてご講演をいただきました。部会員の大塚先生と渡邊敬子先生より、人体計測の結果をもとに日本人の体形変化について報告いただきました。元部会長高部啓子先生には、人体計測を中心に被服構成学部会発足時から現在に至るお話をいただくことができました。本セミナーは企業からの関心の高さが伺われ、現代人の身体寸法に合わせた服作りの基礎資料を提示することで社会に貢献でき、40周年の記念となる成果報告ができたと考えます。

引き続き、大塚先生、高部先生、渡邊先生、武本歩未先生のご尽力によってデータブックが完成し、本誌に同封いたしました。収集したデータを有効に活用していくこと、広く活用されることがこれからの課題です。

恒例となりました「全国中学生創造ものづくり教育フェア」では、本年度も薩本弥生先生に審査委員長をご担当いただきました。

平成30年度研究例会は3月11日に名古屋女子大学で原田妙子先生を中心にご準備いただき開催しました。村瀬弘行氏より、有松鳴海絞りの技を海外に活路を見出された10年の軌跡に関する講演と、学会員によるきもの文化の伝承と海外発信をめざした教育プログラムと授業実践の紹介が行われました。

新元号の最初の夏期セミナーは、森下あおい副部会長を実行委員長とし、来る8月29日・30日に滋賀県立大学（彦根市）での開催を予定しています。奮ってご参加をお待ちしています。

次年度もよろしくお願いいたします。

平成 30 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 30 年 5 月 26 日（土）

場所：日本女子大学

平成 30 年度被服構成学部会総会は、森下あおい副部会長の司会により下記の通り進行した。

総会次第

- | | |
|---------------------------|--------|
| 1. 開 会 の 辞 | 森下あおい |
| 2. 部 会 長 挨 拶 | 川端 博子 |
| 3. 議 長 選 出 | 磯崎 明美 |
| 4. 議 事 | |
| (1) 平成 29 年度事業報告 | 中村 邦子 |
| (2) 平成 29 年度会計報告 | |
| ① 平成 29 年度収支決算報告 | 田中 早苗 |
| ② 平成 29 年度貸借対照表 | 田中 早苗 |
| (3) 平成 29 年度会計監査報告 | 森 由紀 |
| (4) 平成 30 年度事業計画（案）について | 田中 早苗 |
| (5) 平成 30 年度夏期セミナー（案）について | 渡部 旬子 |
| (6) 平成 30 年度予算（案）について | 大塚 有里 |
| 5. 議 長 解 任 | |
| 6. 報 告 事 項 | |
| (1) 科研について | |
| 7. 閉 会 の 辞 | 森下 あおい |

上記の議事について審議し、承認された。

被服構成学部会 40 周年記念特集

被服構成学部会活動の 40 年

一般社団法人 日本家政学会被服構成学部会
部会長 川端 博子（埼玉大学）

今年度、被服構成学部会発足 40 周年を迎えました。

40年前の私は学生でしたから、部会と同時期を歩んできたといえます。1年時に柳澤澄子先生から被服体型学を教わった最後の学年です。当時は被服体型学の研究が活発になされており、入学間もない頃、松山容子先生のご研究に協力して人体計測の被検者になり、ブルーのハンカチを頂戴したことも記憶しています。祖父江茂登子先生・古松弥生先生をはじめとする偉い先生方が土曜日の午後、被服構成学標本室の白いテーブルを囲んで話合っておられました。大学院・助手を務めて8年間大学におりました間、継続された会合は、研究の遂行と本部会の運営に関わるものであったと思います。私は被服体型学の研究はしなかったのですが、大学を離れても本部会で研究を紹介する機会を頂き、科研費などの共同研究に誘って頂いて研究を続けることができました。このようなつながりは、一人で研究している身にとって視野を広める上でもありがたいことでした。以上、思い出にふけりながら私事を書きました。

生活の中に被服が存在する限り、被服構成学は基礎となり、多様な方面に発展できる内容を含みます。身体計測部位の設定、服づくりに必要なサイズシステムの構築のベースは、本部会が中心に行ってきた特筆すべき研究成果です。2013年度採択の科研費による活動が例にあげられるように、本部会が教育・研究面で支え合う拠点となることも使命の一つであると思います。少子化によって学校・大学は一層大変な時代になりますが、知恵を出し合って手を携えて教育・研究を進めていきましょう。

平成21年3月発行の部会誌の後半に30周年記念特集として、当時の部会長泉加代子先生が過去30年間を概観し、活動をまとめて下さいました。第27号よりHPに部会誌が公開されておりますので、40周年は特別なことをしないでいきましょうと提案いたしました。区切りとしてまとめをしておくことは必要と考え、10年間の活動を次ページ以降にまとめましたので、ご覧下さい。

表1には歴代部会長・副部会長一覧、表2と表3には夏期セミナーと研究例会のテーマと内容を掲載しました。夏期セミナーは、一貫して、社会的ニーズ、人材育成そして社会貢献を志向しながら、教育・研究そして服づくりを学び・考える内容になっています。第一線でご活躍の講師陣による講演がなされていますので、部会員はもちろん被服学やアパレル企業の関係者そして学生に参加いただくよう働きかけることが課題です。

研究例会では、ものづくり教育に関する内容が多く見られ、この他に伝統文化に関わるものや見学会が企画されています。日本の高い技術水準を知ること、日本文化の継承そして部会員の親睦を図る役割を果たしています。

この他、「全国中学生創造ものづくり教育フェア」への協賛として、「布を用いた物の製作」の審査委員長を継続しています。「スクールソーイング」の発行も行いました。これらは、家庭科を応援し、製作学習の魅力を伝え、ひいては職業選択へ繋ぐものとして位置づけられます。33号より科研費採択、学位論文などの紹介がなされ、研究支援・若手支援が図られています。

50周年に向けて、引き続き部会員の皆さまのご協力をお願いします。

末筆になりましたが、40周年の記念号発行にあたり先輩先生方には、快くご寄稿頂きましたこと、そしてとりまとめをして下さいました部会誌編集委員の皆さまに、厚く御礼を申し上げます。

表1 歴代部会長・副部会長一覧（15代目以降）

代	年度	部会誌	部会長（所属）	副会長（所属）
15	平成 20・21年	30・31号	泉 加代子 （京都女子大学）	布施谷節子（和洋女子大学） 岡部 和代（京都女子大学短期大学部）
16	平成 22・23年	32・33号	布施谷節子 （和洋女子大学）	岡部 和代（京都女子大学短期大学部） 鳴海多恵子（東京学芸大学）
17	平成 24・25年	34・35号	鳴海多恵子 （東京学芸大学）	大塚美智子（日本女子大学） 森 由紀（甲南女子大学）
18	平成 26・27年	36・37号	森 由紀 （甲南女子大学）	大塚美智子（日本女子大学） 鈴木明子（広島大学）
19	平成 28・29年	38・39号	大塚美智子 （日本女子大学）	鈴木明子（広島大学） 川端博子（埼玉大学）
20	平成 30・31年	40・41号 （予定）	川端博子 （埼玉大学）	渡部句子（文化学園大学短期大学部） 森下あおい（滋賀県立大学）

（敬称略，所属は当時のもので記載している）

表2 夏期セミナー

年度(会場) 実行委員長	テーマ	内容 研究事例報告
平成21年度 8月25・26日 （あわら温泉 グランディア 芳泉） 服部由美子	社会的ニーズに 対応したアパレルの 開発動向	講演1 今，繊維・アパレル産業の展開に何が必要か？ 福井大学 堀 照夫 講演2 ビスコテックスによるパーソナルオーダー事業について セーレン株式会社 牧田 博行 話題提供1 産学連携で取り組む被服構成学的視点からの商品開発 日本女子大学 大塚美智子 話題提供2 福井県工業技術センターのスマートテキスタイルの 取り組みについて 福井県工業技術センター 村上 哲彦 見学 井上プリーツ株式会社とビスコテックススクエア福井
平成22年度 8月23・24日 （日本女子 大学） 大塚美智子	被服構成学的視点 からの情報発信 -ファッション ショーが果たす役割	講演1 ファッションにおけるプレゼンテーションのあり方とその意味 アツロウ・タヤマ デザイナー 田山 淳朗 講演2 ファッションビジネスにおけるファッションショーの役割 元西武百貨店 増田 泰子 話題提供1 パリコレの現場から大学教育の現場へ 和洋女子大学 滝澤 愛 パネルディスカッション 大学発のファッションショーの意義 コーディネータ 日本女子大学 大塚美智子 パネリスト 東京家政大学 雲田 直子 相模女子大学 田中 百子 東京田中短期大学 小田巻淑子 文化女子大学 磯崎 明美
平成23年度 8月30・31日 （三重大学） 増田智恵	衣心地の質の向上 を目指して -着心地と見心地の トータル化を 探りませんか	講演1 被服分野のための3次元体形モデルの開発と応用 大阪大学 黒川 隆夫 講演2 伊勢神宮における衣・食・住 神さまの衣服はどんなの？ NPO法人 五十鈴塾 矢野 憲一 話題提供1 3D体形データの相同化とその統計処理 オンワード樺山 山本 幸生 話題提供2 韓国の人体測定事業及び衣類産業での活用 東ソウル大学校 崔 景美

		<p>パネルディスカッション「3Dデータを生かした衣服設計」 コーディネータ 三重大学 増田 智恵 パネリスト オンワード樫山 山本 幸生 東ソウル大学 崔 景美 ワークショップ・パネル展示 3次元計測体験 浜松ホトニクス(株) 企業情報 東レACS(株), (株)テクノア 教育・研究情報</p>
平成24年度 8月31日・ 9月1日 (オンワード 総合研究所 研修センター) 磯崎明美	グローバルな視点 から学ぶアパレル 教育と企業の動向	講演1 アパレルのマーケティングと商品開発 オンワード樫山 黒部 和夫 見学 オンワード研究研修施設 部会員報告1 イギリスセントマーティンにおける被服教育 東京家政大学 鈴木 由子 部会員報告2 国際学会における Design Exhibition 元東京田中短期大学 小田巻淑子 講演2 アパレル教育と企業の連携について日米比較 ハワイ大学 ミナコ・マッカーシー 講演3 若手パターンメーカー育成プロジェクト“Horusの試み” 東レACS株式会社 久保 忠博 見学 シルク博物館・横浜人形の家
平成25年度 8月29・30日 (倉敷ファッ ションセン ター) 森由紀	アパレルに生かす 人体計測の取り組み	講演1 国際標準化戦略と ISO/TC133 アパレル工業技術研究会 知久 幹夫 講演2 我が国の仁多計測の変遷と今後 元実践女子大学 高部 啓子 計測実習 京都女子大学 渡邊 敬子 部会員報告「人体計測特別委員会中間報告」 日本女子大学 大塚美智子 講演3「学校制服作りの現場から」 明石被服興業株式会社 児島 育子 講演4「我が国のジーンズ製造の歴史」 ジーンズミュージアム 名誉館長 柏野 静夫 見学会 ジーンズミュージアム ベティスミス
平成26年度 8月28日 (アルカディ ア市ヶ谷) 土肥麻佐子	次世代につなぐ 服づくりの技	講演1 ビジネスの立場から次世代に伝えたい技 —アパレル商品開発の技— ファッションビジネス学会 福永 成明 講演2 紳士服の立場から次世代に伝えたい美しい服づくりの技 —オーダーメイドでの身体に合わせた着やすい衣服を作る マニピュレーション技術(立体・デザイン)— 津坂テラー 津坂友一郎 パネルディスカッション 婦人服の立場から次世代に伝えたい美しい服づくりの技 —日本とフランスのプレタポルテの服づくり— NEiSH 代表 西浦 公雄 Dessigns 代表・ファッションデザイナー 星野 貞治 椋山女学園大学 滝澤 愛
平成27年度 8月27・28日 (ウインク あいち) 川端博子	被服と安全・安心	講演1 安全・安心を支える色彩の活用 日本女子大学家政学部 非常勤講師 産業技術総合研究所 名誉リサーチャー 佐川 賢 講演2 子どもの深刻事故予防と製品安全 —保育現場から見える深刻リスク— NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表 掛札 逸美

		<p>講演3 ユニバーサルファッション — 快適な衣生活を目指して — 神戸芸術工科大学 見寺 貞子 部会員報告 1 阪神・淡路大震災から 20 年目の防災意識 甲南女子大学 森 由紀 部会員報告 2 被災地域の衣料品購入について 東京家政大学 田中 早苗 講演4 アパレル商品等の検針, 検品の現状について 株式会社ハシマ 成瀬 一基 講演5 家庭用ミシンを設計する側からみた安心・安全 アイシン精機株式会社 山岡 淳郎 科研費基盤 A による日本人の人体計測に関する報告 日本女子大学 大塚美智子 京都女子大学 渡邊 敬子 見学会 トヨタ産業技術記念会館</p>	
<p>平成28年度 8月24・25日 (グリーンヒル ホテル尾道) 鈴木明子</p>	<p>アパレル人材育成を 目指した小・中・高・ 大学のものづくり教 育の方向性</p>	<p>話題提供 生活デザインの視点から見るアパレル教育 滋賀県立大学 森下あおい みる・かく・つくる de 人づくり 比治山大学 (広島大学名誉教授) 若元 澄男 高校家政科におけるものづくりを通じた人材育成について 広島県立海田高等学校教諭 中村 里佳 地域と学校教育を学ぶアパレル人材教育について 立花テキスタイル研究所 齋藤 知華 氏・新里 カオリ 小・中・高等学校における布を使ったものづくりの学習内容と課題 東京学芸大学名誉教授 鳴海多恵子 パネルディスカッション 講演 今治タオル奇跡の復活—地域再生とブランド戦略— 四国タオル工業組合理事長 近藤 聖司 見学会 コンテックス株式会社工場とタオル美術館</p>	
<p>平成29年度 9月3・4日 第2回家政学 夏季セミナー (信州大学) 大塚美智子</p>	<p>生活の質的向上を 目指す家政学の世界 —オリンピック・ パラリンピックが つなぐユニバーサル 衣料の未来—</p>	<p>講演 脊椎損傷者の体温調節と 循環調節 奈良女子大学 芝崎 学 暑さ対策/障がいを持つアスリー トとの協創について —2020 東京 op/pp へ向けての提案— ミズノ株式会社 荻野 毅 アパレル三次元テクノロジーを 活用したスポーツ衣料開発とシ ンクロする日常衣料開発 株式会社ミズーラ 佐々 浩司</p>	<p>オリンピック日本代用選手団開会 式用 ユニフォームの歴史 —『日の丸カラー』の誕生と継承に 注目して— お茶の水女子大学他非常勤講師 安城 寿子 近代女性スポーツファッション の変遷 —スポーツと装いの愉しみ— 梅花女子大学 好田 由佳 参加型の映像伝達表現としてのプ ロジェクションマッピング NODE-LAB 主催 名古屋産業大学 河村 陽介</p>
		<p>基調講演1 ユニバーサル仕様の衣服設計を考える 京都女子大学 諸岡 晴美 基調講演2 医療福祉用ロボディックウェア curara® の開発と展望 信州大学 橋本 稔 利用者主体のファッション支援 誰もがおしゃれを楽しむために 金城学院大学 平林 由香 カラーユニバーサルデザイン 日本女子大学 佐川 賢</p>	
<p>エクスカーショ ン 信州大学繊維学部 Fii, 上田, 見学コース</p>		<p>真田十万石の城下町松代見学コース</p>	

<p>平成 30 年度 8 月 28・29 日 文化学園大学 渡部 旬子</p>	<p>ファッションビジ ネス戦略における 身体サイズと衣料 サイズの最新動向</p>	<p>基調講演 1 デジタルフィッティングとアパレル EC を支える国際標準化の動向 産業技術総合研究所 持丸 正明</p> <p>講演 1 衣服サイズの国際標準化 株式会社ワコール 中川原正人</p> <p>部会報告 日本人の体形変化 (2014～2016 人体計測データ) 日本女子大学 大塚 美智子 京都女子大学 渡邊 敬子</p> <p>記念講演 身体計測と被服構成学 前実践女子大学・名誉部会員 高部 啓子</p> <p>講演 2 婦人服向け裁断用ボディ 開発の変遷 株式会社 キイヤ 齊藤 晃一</p> <p>講演 3 3D ボディスキャナと 3D 技術を活用したアパレル設計プロセス ビーエム・ディーシステム株式会社 佐藤 隆三</p>
--	--	---

(敬称略, 所属は当時のもので記載している)

表 3 研究例会

年度・会場	テーマ	内容
<p>平成21年度 3月26日 和洋女子大学</p>	<p>大学と中・高校の 被服製作学習の発 展に向けて</p>	<p>話題提供「中・高校・大学の被服製作実習は今、どのように行われているのかー教材を中心にー」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全国調査の結果から 東京学芸大学 鳴海多恵子 2. 高校の実践例 都立青梅総合高校 赤澤 愛 3. 教材販売の状況から (株) アイセック 伊勢 宜央 4. 大学の被服製作実習における問題点 和洋女子大学 柴田 優子 <p>シンポジウム 「被服製作学習の充実に向けて, 中・高校・大学がどのように連携できるか」 コーディネータ 東京学芸大学 鳴海多恵子</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新学習指導要領における被服製作学習のめざすもの 広島大学 鈴木 明子 2. 大学における被服製作学習のめざすもの 昭和女子大学 石垣 理子 3. 中・高校の現場から構成学部に期待するもの 東京学芸大学附属竹早中学校 阿部 睦子 4. 製作教材の開発と普及にむけての提案 和洋女子大学 布施谷 節子
<p>平成 22 年度</p>		<p>東日本大震災のため中止</p>
<p>平成 23 年度 3 月 24 日 和洋女子大学</p>	<p>大学と中・高校の 被服製作学習の発 展に向けて Part II 新学習指導要領の 実施に向けて</p>	<p>講演 家庭用ミシンの近況について (株) ブラザー販売 前田吉徳</p> <p>シンポジウム 「新学習指導要領の実施に向けて, 被服製作学習をどう展開するか」 コーディネータ 静岡大学名誉教授 大村知子</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中学校における被服製作学習について 山梨県教育庁 清水 弘美 2. 高校における被服製作学習について 千葉県立東高校 真田智恵子 3. 大学における被服製作学習の課題について 東北女子大学 葛西 美樹
<p>平成 24 年度 3 月 11 日</p>	<p>山梨方面工場見学 バスツアー</p>	<p>久保田一竹美術館にて一竹辻が花染め見学 糸の音会会員の 3 社 (楨田商店, 山崎織物, 武藤株式会社) 見学</p>

平成 25 年度 3 月 8 日 日本女子大学	きもの文化の伝承と 国内外への発信	講演 1 「和装の文化」 講演 2 「家庭科への発信」 講演 3 「グローバルな視点からの発信」	大妻女子大学 阿部 栄子 埼玉大学 川端 博子 横浜国立大学 薩本 弥生
平成 26 年度 3 月 16 日 甲南女子大学	貴重書から読み解く 服飾の魅力	講演 1 「モード雑誌 JOURNAL DES DAMES ET DES MODES の魅力 — 装いと人社会 —」 講演 2 「源氏物語に描かれた装束」	京都光華女子大学短期大学部 大澤 香奈子 甲南女子大学 米田 明美 図書館貴重書見学
平成 27 年度 3 月 14 日 文化学園大学	他分野との連携から 探る被服構成学 の発展的可能性	講演 1 「生活創政支援に向けた 家政学とロボティクスとの連携の可能性」 講演 2 「地域連携事業への取り組み —産学連携共同研究および学校教育支援活動の事例から—」 講演 3 「デザイナーはどのように体形をとらえるのか —感性工学的アプローチによるデフォルメーションの研究—」	日本女子大学 大塚美智子 熊本大学 雙田 珠己 滋賀県立大学 森下 あおい
平成28年度 3月8日 京都女子大学	大学と中・高校の 被服製作学習の 発展に向けて Part II 新学習指導要領の 実施に向けて	講演 1 「西陣織の技術を掲げ世界市場へ 「～伝統産業からクリエイティブ産業への革新～」 講演 2 「京都の墨流し染・糊流し染 —その新たな可能性—」	株式会社細尾取締役 細尾 真考 京都女子大学 青木 奈保子 見学会 株式会社細尾工房
平成29年度 2月27日 日本女子大学	ICTの活用から探る 被服製作学習の改善	講演 1 教育現場の最新 ICT 環境の状況 講演 2 大学における被服教育での ICT の活用 講演 3 技術・家庭科での ICT を活用した布を用いたものづくり学習 講演 4 新学習指導要領から見る被服製作学習の動向と ICT の位置づけ	東京学芸大学 加藤 直樹 名古屋女子大学 小町谷寿子 埼玉大学 川端 博子 広島大学 鈴木 明子
平成30年度 3月20日 名古屋女子大学	日本の伝統文化 きものを考える	講演 「手仕事の付加価値が世界を動かす —伝統をデザインするブランディング」 事例報告 「きもの文化の伝承と海外発信をめざして」 ゆかた着装を含む教育プログラムの実践と HP の概要の紹介 授業実践報告 「きもの文化学習を軸とした衣生活領域の学習」 中・高校生を対象としたゆかた着装を含む教育プログラムの実践	SUZUSAN クリエイティブディレクター 村瀬 弘行 茨城キリスト教大学 扇澤美千子 山梨県立大学(非) 大矢 幸恵 見学 有松 SUZUSAN ショールーム他

(敬称略, 所属は当時のもので記載している)

元部会長からのメッセージ

元実践女子大学 高部 啓子

被服構成学部会が創立40周年を迎えられたとのこと、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

旧いお話になりますが、昭和24年(1949年)に新しい学制が布かれ日本の教育体制が大きく変わった年に、日本家政学会が誕生しました。新学制のもと、教員養成機関から教育研究機関へと変化した大学で、研究者たちは家事裁縫の諸現象に科学的根拠を示す必要性を余儀なくされました。日本家政学会が設立されたのも研究の進展を求めてのことと推察されます。当初多くの研究者は、近隣の学問領域の手法を取り入れて理論を構築していきました。しかし被服構成学と調理学はともに技術指導が中心であったため、研究を進めるには研究手法の開発から始めねばならず、他領域の手法をそのままダイレクトに使うことが難しいと言われていました。

被服構成学では、まず人の体を覆う被服という「もの」を形つくる領域として、人体の寸法や形状を明らかにすること、布を縫い上げて形づくるために布と縫製技術との関連、衣服を着る観点からも形つくりを考える必要から人体の動きと衣服との関連等を科学的に解明することに着眼点が置かれました。人類学や解剖学、医学や身体運動学、図学、人間工学、物理学等々周辺領域の専門家をお呼びしてご講演や実習をお願いしました。見学などにも伺い、研究手法や着眼点に目を見張り、各自の研究課題に応用していったことを懐かしく思い出します。

そんな中で、柳澤澄子先生はかなり早くから身体計測方法の確立や衣服寸法の設定に関心を向けられ、1961年頃には被服構成学を専門とする大学教員にお声をかけ、女子大学生の身体計測を実施して冊子にまとめていらっしゃいます。日常着の洋装化に伴って既製服の利用が増し、経済の高度成長とともに既製服産業も発達していきました。そこで問題となったのが、衣料サイズです。当時の衣料サイズは、できあがり寸法で表したものや、メーカーによって様々なサイズが使われており不統一でした。それらを統一するためには日本人の身体計測データが必要となります。その頃、自衛隊では制服作成のために身体計測が行われ衣料サイズ設定もされていたようですが男性のみのデータでした。一般人向けの既製服のサイズ設定には、日本人の体格調査が必要であるとの気運が高まり、通商産業省工業技術院が企画し予算を取得して、1965～1967年に第1回の体格調査が実施されました。その調査は被服構成学関連の大学女子教員・教官の協力の下に達成されました。その頃、家政学会では研究を促進するために研究委員会規程が定められ、わずかですが活動のための助成金を交付することになりました。1969年、体格調査に協力したメンバーを中心に被服構成学研究委員会が立ち上がりました。さらに10年後、家政学会では新たに研究部会規定が定められ、その年に被服構成学分野でも研究委員会に代わり被服構成学部会を立ち上げ、以後皆様のご努力により現在に至っています。

基礎学問に比べて日の浅い本領域の最近の研究教育環境を見ますと、若い人口の減少、それに伴う研究ポストの減少、予算の縮小など必ずしも満足いくものでなく、ますます厳しい状況に進んでいるようにも見えます。だからこそ逆境をはねのけるアイデアを膨らませていく必要があると思います。安全性、持続可能性、エコなどの最近のキーワードを視野に入れつつ、「生活弱者といわれる子どもや高齢者にとって、衣服に関する課題は何か？」など部会で議論いただき、多様な切り口から被服構成学ならではの提案を世に問うてほしいと念願しています。例えば、「日本の乳幼児の既製衣料サイズは身長10cm間隔です。海外では5～6cmです。大きすぎる衣服は危険ではないでしょうか？」などもご検討いただきたい一例です。部会のますますのご発展を祈念しております。

元部会長からのメッセージ

元静岡大学 大村 知子

家政学会の部会発足時、被服構成学部会が部会員数最大の部会として各部会の先陣を切ってから40周年を迎えたことは感慨深く、多くの先輩そして後輩部会員の精力的な部会活動の蓄積を礎に、ここに至っていることを部会員として誇りに思います。

私は1988年から運営委員として諸先輩の部会運営に関わる色々な機会を得させて頂きました。乳幼児衣料の調査研究プロジェクトでは毎回のように新幹線の終電に乗るために文化女子大から新宿駅まで走るなどして成果を報告した経験。静岡県唯一の部会員なのに静岡市での研究例会開催を引き受けたことなどから部会活動の多くを学びました。2000年度夏期セミナー実行委員長、2002～2003年度副部会長、2003年度公開講座実行委員長を経て2004・2005年度部会長の重責を担うことになり、夏期セミナー、研究例会に加えて3年連続獲得した科研費による公開講座を東京・名古屋・広島で開催し被服構成学の知見を地域の教育に還元できたことやフランス・イタリア研修旅行などの事業を実施出来たことは実行委員と部会員の強力なご支援とご協力の賜物でした。

研究職をリタイアして10年、今なお部会員の研究動向については常に関心を持ち、家政学会誌が届くと先ず部会員の報文を探します。しかし近年めっきり掲載が少なく寂しいです。部会員が他の学会誌に報文を投稿されていることは散見しますが、家政誌にも家政学会被服構成学部会員の誇りをもって論文を発表し、部の存在とその研究成果を大いに示されることを期待しています。いずれの研究機関においても研究環境は厳しく短期間で成果を求められ、教育や地域貢献などの職務も多くてじっくり研究に取り組む時間が限られ、エネルギーを集中し難い実情は理解しますが、それでもなお皆様には被服構成学研究・教育の発電所として頑張って頂きたい。地方大学で研究環境も人材も貧弱で雑務に追われ、近隣に研究仲間も皆無だった私の長年の経験からの提言ですが、研究の発電源は多種多様にあり、研究規模も可能な方法を模索して知恵を巡らせれば知見が得られると思います。身近の課題や世界の難題などに対して日々五感を敏感にしていると被服構成学領域ならではの研究課題が山積していることに気づくからです。部会には年齢や地域、研究・教育環境やキャリアも様々な会員がいますから先輩・後輩の枠を除いた共同研究の企画や科研費の申請などの試みは「自分育て」となり、その後の発展にもつながります。部会員の減少や研究費の枯渇・研究環境の縮小などを嘆くより、部会員が連携してプロジェクトを立ち上げ、フレッシュな発想や経験知からの思考など多角的視点から追求して成果を創生されることを期待します。

今秋、私は後期高齢者となりましたが教員免許更新講習など公的任務の他に、これまでに得た知見や部会員の研究成果を教員研修や地域市民に還元する変電所役をボランティアでさせて頂いています。小学校教員の研修で「布の耳って何？」とか「ミシン針の太さってどこでわかるのですか？」など驚く質問が多々あります。ワークショップをしたり新学習指導要領移行に向けた提言、新採中学教員の授業支援の要請を受け毎週中学へ通ったりもしています。教員からも生徒からも「先生の授業は楽しいし面白い」と知的好奇心旺盛なのでパワーを得ます。

地域では研究から得た知見を身近な例を加えながら丁寧講演すると「初めて知った」「やっと理解できた」などの反応があり、市民へもっと情報発信する必要性を実感します。私の経験と反省とから、部会員の皆さまには、積極的に社会に向けて研究成果を知らせて人々の生活に寄与する重要な使命も果たして頂くよう提唱するとともに被服構成学研究・教育の一層の発展と充実を祈念し、被服構成学部会にエールを送り結びと致します。

元部会長からのメッセージ

奈良教育大学（非）・元京都女子大学 泉 加代子

被服構成学部会発足40周年、おめでとうございます。

10年前、少子化と被服分野を取り巻く環境の変化にともなって、会員数が大幅に減少し、40周年を迎えられるかどうかと心配していたことは取りこし苦労だったと安堵しております。若い先生方が入会され、3000名以上の人体計測を実施して、衣料サイズの国際標準化に向けて部会員の皆様のご尽力されているとのこと、頼もしく喜ばしいかぎりです。

私は現在、教員養成大学で非常勤をし、5科目担当しています。被服構成学実習Ⅰでは浴衣を製作し、その後小・中・高の教材になる小物作りをしています。教材として浴衣を採り上げた理由は3つあります。1つ目は、小学生が卒業式に袴をはくのが流行しており（禁止した学校もありますが）、家庭科を教えている教員が和服の着付けやたたみ方を知らないかと恥をかくのではないかとの思いからです。2つ目は、浴衣ブームが続いていますが、学生が購入している浴衣は低価格でできるように裁断・縫製されており、布を大切にしたい先人の知恵が詰まっている正式な裁断や縫い方を学生に知ってほしいからです。そして3つ目は、京都では若い女性の和服姿が観光地や繁華街で多数見られますが、ほとんどは原色で浴衣のような柄のレンタル着物を着た中国女性です。裕福になった中国人が日本の土地や家を買って住んでいると報道されていますが、和服の知識を教育しておかないと和服が日本人の民族衣装でなくなってしまうのではないかと心配からです。

学生はまず反物の長さに驚いて、「こんな長い物を縫うのは無理！」そして、「一番過酷な授業！昔の人は偉かった。」と言います。針に糸を通せない、玉結びができない学生を指導する私の方が一番過酷な授業なのですが、形が出来上がってくるにつれて、ほとんどの学生は実習が楽しくなってきます。完成して着付けした時の喜びに満ちた顔、えんえんと撮影会が続きます。「1万円で購入した浴衣は肩当ても居敷当てもついていなかった。先生に教えてもらった浴衣の方がずっと上等だね。」と比較検討し、「出来上がった浴衣を家宝にして、子供ができたからお父さんが縫ったのだと自慢しよう！」と言った男子学生もいます。そして、その後の小物作りは「馬鹿みたいに簡単で楽しい！」と好評です。

今の学生は「やらず嫌い」なのです。小学生の時に裁縫セットを共同購入しても大学に来るまでに使用したのは、フェルトで幼児のおもちゃを作ったのとエプロンを縫っただけ。そのエプロンも出来上がり線や裁ち切り線が印刷してある教材セットを利用しているので、自分で好きな布を購入し、デザインする物作りの楽しさを知らないでいるのです。小・中・高の家庭科教育の中で被服製作実習がなおざりにされてきた結果ではないでしょうか。学生の話を見ると、家庭科の教員がいない中学や高校もあり、他教科の教員が授業をしているそうです。

今、国立大学法人の教育学部では、専門科目の教官が退職すると後任人事を行わないで、専任は教科教育法の教官だけになるとのことです。教育学部の専門科目の先生方は、学生が小・中・高の教員になることを前提に教授法を工夫されていますから、今後の小・中・高の教員の質が低下する改革といえます。被服製作実習を指導できない教員もますます増えてくることでしょう。このような小・中・高の教員に被服構成学部会がどう対応（指導）していくかも部会が50周年、60周年と続いていくための課題の1つではないでしょうか？

元部会長からのメッセージ

元和洋女子大学 布施谷 節子

私が被服構成学部会長の務めさせていただいたのは平成22年、23年度でした。

平成22年度の夏期セミナーでは、日本女子大学で「被服構成学的視点からの情報発信 ―ファッションショーが果たす役割―」と題して、プロのデザイナーの講演や、大学で行うファッションショーについての現状と課題について部会員の先生方からの講演をいただきました。

平成22年度の研究例会は平成23年3月11日に起こった東日本大震災のために中止を余儀なくされました。震災の援助として、家政学会からの呼びかけで、被服構成学部会を中心に針箱を救援物資として現地に届けることになりました。急な呼びかけにもかかわらず、部会員を中心に159セットが集まり、宮城県登米市に送りました。現地では救援衣類の手直しに活用されたということでした。いざという時の部会員の結束力と行動力に心から感激しました。

平成23年度は、平成21年度の研究例会で、「大学と中・高校の被服製作学習の充実に向けて」と題して、中・高校の先生方にも多くご参集いただきました。その場で、製作教材開発と普及に向けて、現場で使える被服製作教材を掲載した本を部会で出版したい旨の提案がなされ、平成22年度の総会で了承され、その年の秋から部会員から製作教材案を募り、編集作業に入りました。教材の製作手順を掲載するだけでなく、基礎的技能をわかりやすく提示し、現場ですぐに役立つように学習指導案も掲載しました。きれいなカラー印刷の「楽しくスクールソーイング」が出来上がりました。平成23年度の研究例会は、「大学と中・高校の被服製作学習の発展に向けてPartⅡ ―新指導要領の実施に向けて―」と題して平成22年度に中止した計画を復活させ、同時に完成した「楽しくスクールソーイング」のお披露目となりました。部会員に配布したのはもちろんのこと、各都道府県の教育委員会に寄贈も致しました。部会員のご努力が実り、各地の教育現場で生かされることを切に願っています。

平成23年度の夏期セミナーは、三重大学において、「衣心地の質の向上を目指して―着心地と見心地のトータル化を探りませんか―」と題して、三次元体型の研究や3Dデータの解析について講演や、三重大学の三次元計測機の見学をさせていただきました。部会員の研究をポスターで発表する試みも致しました。

毎年の夏期セミナーは地方と東京をほぼ交互に行われてきました。地方で開催される場合には、地方在住の運営委員の先生方を中心に実行委員会を結成して、ほぼ一年をかけて計画・立案、実行をしていただきました。地方の特色を生かした企画やおもてなしの数々に、頭が下がる思いでした。楽しい思い出がいっぱいです。

被服構成学部会の運営委員の先生方は、大変真摯に取り組んでくださいます。私は部会長を仰せつかるずっと以前から、度々運営委員をさせていただき、諸先輩のお仕事を拝見しつつ、多くのことを学びました。共に仕事をした運営委員の先生方とは公私共に親しくさせていただき、毎年セミナーや研究例会でお目にかかるのを楽しみにしていました。私は部会で育てていただいたと思っています。退職した今でも、部会に顔を出すと実家に帰ったような安ど感を覚えます。

被服学をめぐる環境は厳しいものがありますが、部会が協賛している全国中学生創造ものづくり教育フェアでは、現場の先生方の熱意や子供たちの努力と才能に驚かされました。まだまだ被服構成は捨てたものではないなと思いつつ、子供たちや学生がさらに被服に興味を持ち、楽しく学べる環境作りを切に望みます。

元部長からのメッセージ

東京学芸大学名誉教授 鳴海 多恵子

被服構成学部会が創立されてから40周年を迎えましたことを心からお慶び申し上げます。

私は平成24年度、25年度に部会長をさせていただきました。その間、多くの方々にご協力いただきましたことを感謝申し上げます。また、本部会の創設にあたっての諸先輩方の先見性やご努力、会員の皆様が部会の活動の充実・発展に尽力してこられたことに敬意を表したいと思います。

私が被服構成学領域の道に進んだ頃は、本部会の前身である被服構成学研究委員会発足の時期でした。初めて家政学会の研究大会で卒論の成果を口頭発表した時、降壇するやいなや周囲を先生方に囲まれ、統計処理の知識をどのように得たのか、実験試料の諸元を測定した機器はどうしたのか、など質問攻めになりました。会場は立ち見が出るほどでしたし、研究情報を吸収し、それまでの裁縫教育を学問として打ち立てようとする熱意と気迫に圧倒される思いでした。

その後、委員会が構成学部会となり、夏期セミナーなど研修活動が活発に行われるようになりました。私も研究事例報告をさせていただく機会があり、種々の布のいせこみ性を数量的に評価する、という試みについて報告し、分科会で質問やご助言をいただくことになりました。当時は既製の測定器は無く、専門業者に発注するという知恵も予算も無かったので、ホームセンターで購入した材料で手作りした装置を用いていました。分科会ではそれに関する指摘や助言があるものと期待していました。ところが私を困らせた方々からは、大学での技術指導の低い評価に対する愚痴や論文業績につながる研究実績が作れない苦しさなどが吐露され、涙ながらに話される方もおられました。他の事例報告が「パソコン導入」や「動作分析」をテーマとする中で、縫製技術を扱った私の報告に親しみを感じて集まられたのだと思いますが、かつては女子教育の中心であった裁縫を大学の科目として組み入れることの難しさと、研究者としての実績につなげる自己研鑽とその環境整備の重要性を痛感させられました。

被服構成学部会の40年間は多岐にわたる研究実績と活動を広げ、産業界や教育界に貢献してきましたが、今後の活動の方向性として、私は被服製作の技術の伝承と人材育成をあげたいと思います。

被服作りの技術が家庭で伝承されることが希有になった現代では、それを担う教育の場は貴重であり、技術指導ができる、特に縫製科学の理論に基づく指導ができる構成学の専門家の存在は大変貴重になっています。大学生の指導の内実としては、縫製用語や技術の習得が往時のような専門的レベルには到達しない悩みはありますが、被服製作文化を伝承する責務として、被服構成学の知識と技術をしっかりと指導していく必要があると思います。また、衣生活が工業製品で賄われる中で、アパレル産業の動向は私たちの生活の質ばかりでなく、被服の価値意識へも影響を与えています。生産の流れが、安価で短いサイクルで消費される商品に対応することが主流となり、生産の場が海外に移っている昨今では、国内のアパレル業界では衣料設計ができる人材、商品の真の価値を評価できる人材は少なくなっていると言われていています。それ故に、その製品を利用する若い人々の被服の評価力低下を来しているのではないのでしょうか。良質な被服を設計できる人材、あるいは見極める能力を身につけた人材、さらにそれらの人材を育成する指導者の輩出が、今後も重要であろうと考えます。

元部会長からのメッセージ

甲南女子大学 森 由紀

被服構成学部会設立40周年、誠におめでとうございます。記念すべき節目に当たり、部会員の皆様のご尽力に改めて敬意を表したいと存じます。

思い起こせば、私と被服構成学部会との出会いは昭和55年に遡ります。当時修士課程2年生で、恩師の増田茅子先生に勧められ、国立婦人会館で開催された夏期セミナーに参加した時のことです。今さらながら気づきましたが、部会主催の第1回目の夏期セミナーでした。ただ「家庭科の被服実習が好きだから」程度の軽い気持ちから家政学部被服学科に学び始め、きれいに仕立てる、快適に美しく装う、それらが全て科学的に説明されることにワクワクする学生時代を過ごしました。被服構成学研究委員会が部会となって飛躍する時期に、学問として確立されてまだ日の浅い被服構成学に学ぶ楽しさを教えられていたこととなります。

そして、くしくも副部会長・部会長を拝命した時に、柳沢澄子先生をはじめ、被服構成学の創設期を築かれた錚々たる先生方の訃報が相次ぎました。一つの大きな時代が幕を閉じ、礎を失ったかのように多くの皆様が感じられたことと思いますが、時期を同じくして大塚美智子先生を中心とする全国的な体型計測が実施され、新たな時代のデータを集めることとなりました。不思議な巡り合わせとでも申しましょうか、体計計測とその分析を基に学問化された被服構成学の原点に立ち返った取り組みであり、今は亡き先生方の熱い想いが脈々と受け継がれていることを実感いたしました。時を経て、当時と比較すれば革新的といえる3次元計測を伴ったものでした。

さて、今、第4次産業革命進行中といわれており、アパレル業界において求められる能力は今後急激に変化していき、教育にもそれへの対応が求められることとなるのでしょうか。翻って生活者の衣生活に目を向けますと、今こそ、衣服本来の役割を改めて確認すべき時ではないかと思います。なぜなら、ファストファッションに席卷されていると言っても過言ではなく、身の回りには衣服があふれ一見非常に豊かなようですが、実は大変貧しい衣生活を送っているとの印象を受けるからです。布地の素晴らしさ、仕立ての良さ、適合度の高い衣服による着心地の良さなどを感じることもなく、ただただ流行という情報に踊らされている気がします。それは大量消費、大量廃棄という社会的な問題にもつながります。持続可能な社会の構築という点からも、本当に豊かな衣生活とは何か、議論の必要があります。

また、近年、日本中で自然災害が多発し、関西においても昨年のお阪北部地震や大雨による甚大な被害が発生しました。災害時、衣服が生死を分けることもあります。阪神淡路大震災経験者として、日々の正しい衣生活があつてこそ、いざというときに危機管理ができるものと強く思います。

大学以前の被服学習が縮小され、知識も技術も持ち合わせていない学生を指導する難しさは、部会員の皆様共通の悩みです。その上、以前であれば各家庭において受け継がれてきた衣生活の知恵や文化も失われつつある現状においては、さらに困難を極めることではありますが、学生だけを教育対象とするのではなく、広く社会への啓発も必要ではないでしょうか。

社会情勢に合わせ柔軟に対応つつ、衣服の本質を見失わないような研究・教育への取り組みに、部会員の皆様の叡智を集めることが大事であると考えます。

元部会長からのメッセージ

日本女子大学 大塚 美智子

被服構成学学部会創設40周年おめでとうございます。私が助手をしていた40年前に夏期セミナーで、柳沢澄子先生、水梨サワ子先生、石毛フミ子先生という錚々たる先生方をお迎えし、被服構成学の若手ホープとして体形分野から芦澤玖美先生、衛生分野から田村照子先生、縫製分野から永井房子先生が各分野の未来に向けてお話をされました。当時の被服構成学学部会は活気にあふれ皆さんが輝いていらしたことを思い出します。あの時が被服構成学学部会のスタートであり、その後多くの優れた研究者が輩出されてきたのだと感慨深い思いがいたします。

さて私は平成28年度、29年度の部会長を担当させていただきました。平成24年に当時の部会長の鳴海多恵子先生、副部会長の森由紀先生と共に数名の運営委員で、日本人の人体計測がしばらく行われていないので、実施したい。そのためには部会員有志で科研費に申請し、人体計測のための財源を確保しようということになりました。当時は過去の計測に参加された多くの大学教員が退職時期を迎えていましたので、若い世代への計測技術の伝承も必須となっており、計測を実施することが急務でした。

日本のアパレルの国際競争力を高め、質の高い衣服生産を支援するためには、アパレル設計のための最新の人体計測データベースを構築し、公開していくことが不可欠であり、業界からも高い要請がありました。さらに2010年から中国の呼びかけによりISO/TC133では、人体計測やサイジング、バーチャルフィッティングなどに関する検討がスタートしており、そうした検討のための根拠となるデータも求められていました。

そこで当時科研費代表としての課題がなかった私が代表研究者として申請することになり、2013年に日本学術振興会科学研究費基盤研究(A)(課題番号25242010)に「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」を課題として応募しました。これが採択されると、多くの部会員の皆様が、このプロジェクトにご賛同下さり、大きな盛り上がりの中で日本人の人体計測をスタートさせ、実施することが出来ました。本人体計測では2014年～2016年にかけて日本人18歳～90歳代までの男女の手計測3200名と三次元計測約2000名のデータを採取し、日本人の人体寸法・形状データベース2014-2016を構築しました。

科研の研究期間には被服構成学学部会夏期セミナーで年度ごとの進捗状況をご報告させていただき、2017年、2018年には他学会でも人体計測結果に関する成果報告のセミナーを実施しましたが、産官学の多くの皆様のご参加を得ることができました。そして2018年12月には日本人成人の人体寸法データブック2014-2016を発行し、部会員の皆様にも配布させていただきました。本データブックは社団法人人間生活工学研究センターが発行した日本人の人体計測データベース2004-2006から10年が経過した日本人の人体計測値を示したものですが、新しい日本人の体型情報となるため多方面から関心が寄せられています。

また人間生活工学研究センター1992-1994日本人の人体計測データベースに基づき制定されているJIS衣料サイズも、被服構成学学部会の2014-2016データベースに基づき20年ぶりに改正の検討が進められています。このように本人体計測は被服構成学学部会による大きな社会貢献となっています。

私の副部会長、部会長としての仕事はこの人体計測に終始しましたが、本科研費による人体計測は、被服構成学学部会の皆様の熱意と奉仕の心から実現しました。被服構成学学部会の皆様のご協力に心より感謝の意を表したいと思います。今後は本データを用いた研究成果が公表されていきますことを期待しております。

平成 30 年度 被服構成学部会夏期セミナー(創立 40 周年記念)

テーマ:ファッションビジネス戦略における身体サイズと衣料サイズの最新動向

日 程:平成 30 年 8 月 28 日(火)・29 日(水)

会 場:文化学園大学(東京都渋谷区代々木 3-22-1)

8 月 28 日(火)	
12:30～	受付開始
13:00～13:10	開会の辞
13:10～14:10	<p><基調講演> デジタルフィッティングとアパレル EC を支える国際標準化の動向 ～ISO TC133, IEEE 3D Body Process Standard～ ISO TC133 国内審議会委員長 ・ 産業技術総合研究所 持丸 正明 氏</p>
14:10～15:10	<p><講演 1> 衣服サイズの国際標準化 ISO TC133 国内審議会委員 ・ 株式会社ワコール 中川原 正人 氏</p>
15:10～15:30	休憩
15:30～17:00	<p><部会報告> 日本人の体形変化 (2014～2016 人体計測データ) ISO TC133 国内審議会委員 ・ 日本女子大学 大塚 美智子 氏 ISO TC133 国内審議会委員 ・ 京都女子大学 渡邊 敬子 氏</p>
17:00～17:45	<p><記念講演> 身体計測と被服構成学 ISO TC133 国内審議会委員 ・ 元実践女子大学 高部 啓子 氏</p>
17:45～18:00	移動
18:00～20:00	<p><懇親会> 会場:文化学園大学 スペース 21</p>
8 月 29 日(水)	
9:00～	受付開始
9:30～10:30	<p><講演 2> 婦人服向け裁断用ボディ開発の変遷 フォルムとサイズから考察する 株式会社 キイヤ 齊藤 晃一 氏</p>
10:30～10:50	休憩
10:50～11:50	<p><講演 3> 3D ボディスキャナと3D 技術を活用したアパレル設計プロセス ビーエム・ディーシステム株式会社 佐藤 隆三 氏</p>
11:50～13:00	昼食および移動
13:15～13:45 or 13:45～14:15	<p><見学> 計測ラボ(三次元計測) ビーエム・ディーシステム株式会社(水道橋駅)</p>

基調講演

デジタルフィッティングとアパレル EC を支える国際標準化の動向 ～ ISO TC133, IEEE 3D Body Process Standard ～

ISOTC133 国内審議会委員長・産業技術総合研究所 持丸 正明 氏



近年インターネット上でアパレルの着装をデジタル表示する技術が向上し、E-commerceの市場が拡大している。本講演ではこれらを支えるデジタルフィッティングの国際標準化について、標準の基礎的な事項から最新動向までをわかりやすく解説していただいた。概要は以下のようである。

標準は「規制」ではなく「合意」である。合意することで合意者同士が便利になり、社会全体が良い方向に向かうための手段である。合意の種類には「構造標準」、「性能標準」、「プロセス標準」がある。デジタルフィッティングに関する標準は、やり方を具体的に規定するプロセス標準であり、品質の評価尺度の合意をはかるものである。標準にはすべての製造・販売元が適用範囲となるデジュール標準と、フォーラム参加者を適用範囲とするフォーラム標準がある。

デジュール標準の一つであるISOでは、デジタルフィッティングは Clothing sizing system に関する技術委員会であるTC133のWG2で審議されている。TC133は4つの作業部会にわかれている。WG1では韓国とUKが主導してアパレルサイズ規格の基本となる人体寸法計測法が審議され、ランドマーク位置、計測項目の名称、計測方法が標準化された。WG3ではフランス主導で衣服のサイズに関する人体寸法の表記方法およびサイズ表を正しく構成する方法論、WG4では南アフリカ主導で衣類そのものの寸法計測に関する標準化が行われた。

WG2では、韓国の主導でアパレル電子商取引の基盤となる仮想人体、仮想衣類の用語が標準化された。現在にはそれに加え、日本の主導でデジタルフィッティングシステムの評価軸を作るための審議が行われている。WG2は3つのPartに分かれており、Part1は人体をコンピュータ上でモデル化した時の人体モデルを評価する評価軸に関する標準である。個人体型に対する仮想人体モデルおよび人台に対する仮想人台モデルの再現精度や誤差を、レポート上で表現するための要求項目を審議している。Part2は仮想衣服の再現性を評価するための標準であり、デジタル型紙とデジタル衣服の寸法の差、すなわちコンピュータ上の2次元型紙の寸法と、その型紙を用いてシーチング素材の布をデジタル縫製して、デジタルボディにフィッティングしたものである仮想衣服の寸法との差を評価するための尺度が審議されている。Part3では個人体型とアパレル製品のフィッティングに関する標準である。フィット感につながる物理量として隙間を評価項目とし、人台と衣服の間の実測隙間と、仮想人台と仮想衣服の間の仮想隙間の差についての評価軸の標準化を審議している。

この他、フォーラム標準のひとつであるIEEE (国際電子電気学会)においても、2016年より3DBP (Body Processing) standards を策定するための準備がすすんでいる。アメリカの半導体素子メーカーであるインテルが発議したもので、インテルはアパレルクラウドサービスのE-commerceのプラットフォームをつくり主導したいと考えていることが予想される。アメリカ、韓国、ドイツなどにある多数の3Dアパレルシミュレーションに関する会社とそのメンバーである。現在ファイルフォーマットの標準、セキュリティー、メタデータ、ランドマークの定義や自動ランドマークの精度、計測誤差のデータ管理も含めた質的なことに関する審議が行われている。

標準の策定から関与することは、ルールの変化への準備ができるという利点がある。興味のある研究者は国内審議委員会にオブザーバーとして参加することもできるので協力してほしい。

(記録: 土肥 麻佐子)

講演 1

衣服サイズの国際標準化 ISO TC133 WG3 の活動

ISO TC133 国内審議会委員・株式会社ワコール 中川原 正人 氏

本講演の講師である（株）ワコール 品質保証部の中川原氏は、ISO TC133 国内審議会委員に従事されている。TC133 は ISO において、「衣服のサイジングシステム」の標準化を担う技術委員会である。

TC133 WG3 の成果物は、2017 年に発行した ISO8559-2（衣服サイズの第一・第二表示部位）と、現在、最終審議段階である ISO/FDIS8559-3（身体計測データからサイズインターバル表を作成する方法）の二つである。衣料サイズ標準化の歴史は、1970～80 年代にかけて活動が行われ、いくつかの IS や TR が作成されている。しかしながら、1990 年を最後に約 20 年間、ISO TC133 の活動は休止した。2010 年に活動を再開したが、その際に掲げられた目的は、「衣服のフィッティング向上による消費者満足の上昇と返品コストの削減」であった。

最終審議中である ISO/FDIS8559-3 の内容及び特徴は、ターゲット、測定対象部位や統計手法の選定であり、サイズ表の項目、サイズインターバルは全て自由、また、体型データの存在で規格することが前提というものであった。目的として、既製服サイジングのプライベート化・カスタム化の手法提供（既製服作りのオーダーメイド化）、アパレルメーカーがターゲット顧客の精密な体型分析とジャストフィット衣料製造・ガバレッジ向上のための活用であった。有効性については、（株）オンワード樫山 生産本部 山本幸生氏により分析され、骨の寸法、肉の寸法の両方を説明変数にすることで、人体のあらゆる箇所の目的変数として精度よく説明可能であり、本規格が推奨する重回帰分析により様々な人体寸法の高精度なサイズ表を作ることができ、FDIS8559-3 は有効性の高いものであることが検証された。まとめとして、単純に JIS の構造標準を守ろうと活動開始した 5 年前には想像できなかった変化が今起ころうとしていること、身体計測方法及び基本身体寸法は標準化の意義が大きいこと、サイズインターバルの標準化は柔軟さが必要であること、サイズコードは有用であり、相対的な大小の共通言語として決めておくこと、ISO/FDIS8559-3 に最も正しく対処する方法は国による体型計測データ（非個人情報化、密度関係化）の提供かもしれないことを述べられた。

中川原氏は、メディア等で話題となっている ZOTOSUIT についても触れられ、アパレルの流通システムがバーチャルでの着想確認を経ての個別生産に移行していく可能性を示唆された。また、WG のトレヴィゾ総会が行われる前にフランス人コンビナへ直接手紙やメールを複数回送付し、衣服サイズの国際標準化によって、蓄積した技術が使えなくなることや、消費者の便宜を損なうことになれば、ISO 本来の目的に反するといったマイナス面を懸念し、総会前の接触を求めたとのことである。国際的な標準化（ISO 規格）が進む中で、被服の分野においても衣類等の洗濯表示（取扱い表示）の変更等が既になされている。世界基準へ統制、時代の流れに沿うことの重要性と共に、全ての物事が一様でなく、時にはそこに沿わないことが消費者の利便性に繋がるなど柔軟かつ多角的な視野を持つことの重要性を考えることができる貴重な内容であった。



（記録：末弘 由佳理）

日本人の体形変化（2014～2016 人体計測データ）

ISO TC133 国内審議会委員・日本女子大学 大塚 美智子 氏
ISO TC133 国内審議会委員・京都女子大学 渡邊 敬子 氏

研究代表者である大塚氏を筆頭に、本部会にて5年間に渡り実施してきた大規模計測（日本学術振興会科学研究費基盤研究(A)（課題番号 25242010）「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」）が昨年度無事に終了した。そこで今回は、本研究のまとめおよび計測結果の概要を大塚氏に、3次元計測の概要を渡邊氏にご報告頂いた。

はじめに、大塚氏より本研究の経緯についてご説明頂いた。以前の大規模計測から時代が進み日本人の体形が変化していること、世界で進んでいる大規模計測が日本では実施されていないことなどから、日本でも最新の人体計測データベースを構築し公開していくことが不可欠となっていた。そこで、9大学の教員を中心に多くの本部会員が協力し合い、手計測と3次元計測が実施され手計測3200名（含む3次元計測2000名）のデータが得られた。また、多くの企業のご協力により社会人データも充実させることができた。

計測結果は、時代による体型変化を検討するため、1992-1994 データと今回の2014-2016 データを比較した。今回の2014-2016 データは、学生の被験者（20歳代）の比率が高いため、平成27年度総務省人口統計に基づき各年代の重み付けがされている。特徴として成人男性は、平均身長が増加、30歳代以下のヒップの減少、50歳代までの股下高の維持が挙げられた。成人女性は、平均身長が増加、PPサイズの割合減少、Tサイズの割合増加、50歳代までの乳頭高の維持などが挙げられた。要因として、80歳代以上の高齢者が2014-2016 データに含まれないことによる低身長者の減少、生活習慣によるヒップの変化、50歳代女性の意識の変化などが考えられる。

渡邊氏からは、3次元計測についてご報告頂いた。今回、手計測と同一の被験者のうち20歳から79歳までの1847名（男子824名、女子1023名）から3次元計測データが得られた。1300点もの点群による仮想モデルから相同モデルを作り、各々のデータを7つのクラスターに体型を類型化し、年代別にクラスターの割合を導き出し検討した。それにより、年代別の傾向は見られるものの、各年代にどのタイプも存在することが明らかとなった。つまり、従来の年代による平均的なボディのみの検討は的外れとなる危険性があることが示唆された。また、今後3次元計測データを活用する際や、解析時に主成分分析を行う際の留意点等もご教示下さった。

本計測結果は、データブックとして発刊できるよう大塚氏を中心にまとめて下さっている。本講演にて、現時点での完成成分を回覧して頂いたが、計測項目毎に計測結果・計測箇所・ヒストグラムが記載されており、非常に明瞭であった。研究者は勿論のこと、企業の方々も活用できる貴重な資料であり、発刊されることが大変待ち遠しい。また、本データに基づきJIS改訂に向けた検討が9月からスタートすること。本部会員が携わった計測結果が、現代のアパレル商品の充実および発展に大きく繋がることが期待される、心躍るような大変貴重なご報告であった。



（記録：角田 千枝）

身体計測と被服構成学

ISO TC133 国内審議会委員・元実践女子大学・名誉部会員 高部 啓子 氏

1. お裁縫から学問への模索と体型研究の萌芽

昭和24年から新学生制度が施行され、他の師範学校とともに女子高等師範学校が新制大学として教員養成機関から学術研究機関として移行し、お茶の水女子大学家政学部被服学科が誕生し、被服の設計製作に関する学問的位置づけの模索が始まった。恩師の柳澤澄子先生は当時の既成衣服の標準寸法に疑問と関心を深められ、身体計測法を学ばれ、新制大学発足後の約10年間に女子大学生、成人女子、高校生女子、中学生女子、男女の小学生・幼児の身体計測を実施し、体型分類と各体型に対する身体寸法を推定し、女性の体型的特徴や成長に伴う体型変化等を明らかにし、被服構成学における体型研究の萌芽期を牽引された。

2. 日本人の体格調査と衣料サイズ規格への適応

本格的な第1回目の全国調査は昭和40～42年に通商産業省工業技術院が既成衣服のサイズの改善を目的とした体型調査を企画し、官・学・業界・消費者領域の専門家により体格調査専門委員会が組織され実施された。高部先生はプロジェクトの助手として委託団体に採用され、柳澤先生の元に派遣され、調査に関わられた。調査対象者は母集団の縮図になるように任意抽出が理想であるが現実的に不可能であるため、調査に関わった研究者の大学周辺で調査対象を求める方法を採用した。調査知育は旭川市から鹿児島市に至る13の中都市および京浜・京阪の大都市2地区の15地区で17班が編成された。初年度は計測項目の選択、計測方法の確立とマニュアル作成、計測用具の調達、計測班の編成、調査対象の把握、計測の流れの確認、身体計測に関する研修会の実施にあてられた。2、3年目に本格調査を実施し、3年間で30000人の計測データが得られた。さらに昭和46～47年に工業技術院による同様の企画で9000人のデータを得ることができ、4～65歳の合計39000人のデータが得られた。第2回目は工業技術院が昭和53～57年に前回からの10年間での日本人の体格体型の変化を鑑みてJIS衣料サイズ推進協議会に委託して実施した。この2回はすべて手計測で自動計測の必要性が指摘されていた。第3回、4回は人間生活工学研究センター(HQL)により平成4～6年に全国10地区で7～90歳男女34000人、平成16～18年に6700人の成人対象の体格調査が実施され、3次元計測器と手計測の両方で計測項目を分けて実施された。この調査にも被服構成学部会に所属する多くの会員が協力したが取得したデータに関しては購入を余儀なくされ、計測データの分析が十分になされないままに時がたっていった。体格検査の成果は一般市民の男女の身体データを得られたこと、被服造形のための身体計測法が確立されたこと、大量の身体データの計測に部会を中心としてチームワークを達成できたことである。身体計測データはJISの既成衣料サイズ規格作成に用いられ、体格調査のデータベースは何回かの改定を経て現在のJIS規格にも活用されている。また、グローバル化に対応するため、衣料サイズに関わるISO(国際規格)に対応するためにも自国の体格調査に基づいた規格作成は重要である。

今回、全国調査が実施されていない現状を憂い、自由に使えるデータを部会員自らの手でという機運が高まり、科学研究費基盤研究Aに申請・採択され、調査が実現し、成人男女合計3000人の手計測データと2000人の3次元計測データが得られた。手計測と3次元計測が同時に行われたデータは大変貴重で今後の解析が期待される。

(記録：薩本 弥生)



講演時の高部先生

婦人服向け裁断用ボディ開発の変遷 フォルムとサイズから考察する

株式会社キイヤ 齊藤 晃一 氏



ボディは人の体型を反映させるだけでなく、時代時代で表現したいファッションのシルエットを作り出すために更新されてきた。国内唯一のボディメーカーであるキイヤの齊藤氏より、製作者や顧客の要望を取り入れながら衣料サイズと密接に関連して開発されてきた裁断用ボディの変遷についてお話を伺った。

明治時代、洋装化を進める衣服の改良運動が起こり、洋服作りの研究とともに日本におけるボディの歴史も始まった。洋装の文化とともに海外から入ってきた人台を参考にテーラー出身のキイヤ創業者藤塚康次は婦人服用人台も手掛けた。当時は規格もなく、ダルマ式という雄型を芯として外側に形成していく制作方法であったためサイズや形状を揃えにくかったが、戦後雌型式を開発することにより均一の形とサイズで量産できるようになっていく。戦後女性の洋装化とともに昭和20年代半ばには洋裁学校が急増し、教育の場に向けそれぞれの原型に対応した学校専用ボディの開発も進んだ。洋服作りが盛り上がる中でボディとの結びつきが強く意識されるようになり、立体裁断用のボディを打ち出すようになっていく。伊藤 (ICA) 型、山脇型、F (フランス) 型など初期のボディはいずれもヌードボディであるが、それぞれの開発者の理想とする体型が色濃く反映されている。この中で製図のシステムとボディの形状を一致させ合理的な作りとなっているICA型は後のロングセラー工業用ボディキプリス開発の際のコンセプトに繋がっていく。また、日本初の立体裁断技術書を作成し初期の文化式ボディを開発した小池千枝氏による「胸部はやや反身でありながら背部は日常取りやすいやや安楽な姿勢」というボディならではの表現形状は、現在まで通じる造形美と機能性を両立させる衣服づくりのための裁断ボディの鉄則となっている。

その後、新しく開発される化学繊維の販路拡大のためにアパレル産業が誕生し、だれもが着られて美しく見え、必要な時に買える既制服の時代をもたらすというミッションの下に、各大手合繊メーカーによる各種の工業用ボディの開発が進められた。工業用ボディは合理的科学的に既制服作りを作業できることを目的として作られ、着やすく美しいシルエットを作りやすくするためのゆとりが配分されている。

さらに現在では個性を追求する流れになり、テキスタイルの変化に対応したより自由な服作りが発想できるボディが求められるようになって、再びゆとりのないヌードボディにトレンドが移っている。女性のパンツの着用率に合わせ、トルソー型だけでなくパンツ型の開発も進めている。ファッショントレンドが繰り返しながらも違うニュアンスが加わっていくように、ボディもヌードに戻りながらも進化している。また企業活動としては国内だけでなく、ヨーロッパ向けやアジア圏向けにそれぞれの体格の違いを反映させたボディ開発も行い販路を広げつつある。

今後は、3Dスキャナ、3Dプリンタなども利用し、職人の感性を加えてデジタルとアナログの融合によるよりよいボディづくりを目指したい、教育・研究の場とも協力してグローバルに認知されるような未来のボディを作りたいと抱負を語られた。そして、これからのアパレル業界を盛り立てていくために若い人材の育成を部会には期待したいと話を締めくくられた。



(記録：石垣 理子)

講演 3

3D ボディスキャナと 3D 技術を活用したアパレル設計プロセス

ビーエム・ディーシステム株式会社 佐藤 隆三 氏

3D人体計測ラボラトリー：ビーエム・ディーシステム株式会社を主宰する佐藤隆三氏は、かつて旭化成株式会社で工業用ボディやアパレルCADシステムの開発に30年携われてきた。「CADをやってもパターンは良くなる。お客さんは満足しない。なぜか？着る人間の体型データをとっていない。」と率直に申される。旭化成株式会社を退職後、2001年に浜松ホトニクス製の3D人体計測システムを設置した計測ラボを開設した。それがビーエム・ディーシステム株式会社、BMDはBody Measurement Design systemが語源である。設立当初はたいへん苦労されたが「ヨーカドーが大きいサイズに困っている。」と、初めに大きいサイズを60名くらい計測して発砲スチロールでボディを作り、パーツパターンをバーチャルフィッティングしてパターンを修正するアドバイス、新規取引先にはブロックパターンを開発して配るなどして、婦人ものスーツ、紳士パンツのパターン品質の均質化に力を注ぐ一方、アメリカやドイツに出向き、サイズシステムや3Dボディスキャナのソフトウェアを試された。話題は独 VITRONIC 社製の3Dスキャナと米 SIZESTREAM 社製の SS20の性能比較。同社が2018年から販売する3DスキャナSS20はSizeStreamの略、レーザーではなく赤外線センサー、2億以上のポイントデータを4秒以内で400以上の部位を計測する。夏期セミナー2日目午後の見学先でもあった同社で最近の3Dスキャナの目覚ましい性能向上に驚いた。計測データをたくさん集めるためには被検者にとって気軽で秘匿性のある計測法でなくてはならないという点で、3Dボディスキャナのスキャン性能は重要である。アメリカではショッピングモールあたりに置いて自分自身でボタンを押して計測するという合理性に感嘆である。

次に3Dで取った計測データをどのように統計処理して設計企画やターゲットをどう決めるか。「多変量分析を人体でやると複雑すぎて解らなくなるので、そういうのはやめてシンプルに。」話について行けそうで安堵する。人体計測部位の特性は、基本統計量、度数分布、ヒストグラムでとらえ、計測部位の関係は散布図と相関関係でとらえる。また、相関関係にある人体部位の計測値は回帰分析で推定する。例えば、ヒップと大腿部の関係、相関関係があると回帰式が出る。回帰式でヒップの値を決めると大腿の値がわかる。回帰係数はピッチになる。3cmピッチで動いたとき大腿部は何センチピッチかが決まる。たいへん解りやすい。さらにサイズ規格はトップス23項目を測り、回帰分析によって周、幅、丈のサイズ構成表を作る。さらに断面形状、横径、厚径を出して体型設定をする。ターゲットのサイズ分析と体型分析ができればブロックパターンを作りバーチャルフィッティング、ファーストパターンを作ってメーカーに提案する。そして、ターゲットのマスターサイズの人体モデルを(株)テクノアの3Dソフトで作成し、商品企画で作成したファーストパターンをKESの生地特性を加味してバーチャルフィッティング、パターンを修正、グッドフィット・シミュレーションを実行する。佐藤氏が描くビジネスモデルは、「お客さんを計測して計測結果をアドバイス、バーチャルボディを作ってお客さん自身が3Dデータを店舗に持って行って、バーチャルフィッティングしやすくする。」試着室で服を脱がなくてもよい時代はもうすぐ、かも知れない。



(記録：田中 早苗)

見学

計測ラボ（三次元計測），ビーエム・ディーシステム株式会社

名古屋女子大学短期大学部 原田 妙子

日本家政学会被服構成学部会夏期セミナーの2日目見学会として、午前中の講演「3Dボディアスキャナと3D技術を活用したアパレル設計プロセス」を受けて、ビーエム・ディーシステム株式会社社長斉藤隆三氏のご厚意により、水道橋にある計測ラボを見学させていただいた。希望者が多数であったため、部会員30名を2班に分けての見学となった。

3Dボディアスキャナは、従来の撮影と違い、20の赤外線センサーを使い2億以上のポイントデータを4秒以内で収集するため、非常にコンパクトに作られており、見学者の数人が、実際にデータを取っていただいた。



さらに、そこで得たデータをパソコンに取り込み、ターゲットのサイズ構成表やマスターサイズ体型、ブロックパターン作成へと繋げていく過程も、見せていただいた。3Dボディアスキャナで取り込んだデータを用いて作られたジャケットやワンピース、ターゲットの体型モデルなどの実物も、見学できた。

3Dボディアスキャナはコンパクトなため、体形データを採取するためには、機器を人の多くいる場所に移動することが出来るため、非常に有効である。

今回のセミナーで、体型計測について多くの最新の情報が得られて、改めて考えさせられることが多い実りのあるセミナーとなったのは、私だけではないであろう。



夏期セミナーに参加して

文化学園大学短期大学部 井口 彰子

平成30年8月28, 29日に文化学園大学で開催された夏期セミナー「ファッションビジネス戦略における身体サイズと衣料サイズの最新動向」に参加させていただきました。ファッションビジネスのグローバル化の中での衣料サイズの動向を学びながら、教育や研究を考える機会となるセミナーであり、どの講演も大変興味深いものでした。

1日目の「デジタルフィッティングとアパレルECを支える国際標準化の動向」と「衣料サイズの国際標準化」の講演では、衣服サイズの国際標準化についての議論の推移とIS008559シリーズの合意の流れを知ることが出来ました。衣料サイズが国際標準化することで、日本のアパレル製品が世界市場に展開しやすくなり国際競争力の強みとなると実感しました。これからJIS衣料サイズ改訂の議論がはじまろうとしています。今後の動向に注目していきたいと思います。次の部会員報告では、大塚先生から部会員が2014年～2016年に実施した人体計測の結果と概要について講演いただきました。日本人の体型変化の傾向を詳細に知ることができました。渡邊先生の3次元データ解析による体型分類の講演では、データの取り扱い留意点について男子の体幹部の体型特徴を例に取り上げて紹介されました。これらのデータベースを構築していくことが、これからの日本のファッションビジネスにおいて、アパレル製品のフィッティングの向上が顧客満足度につながり、返品ロスの削減が可能となると思いました。最後は創立40周年の記念講演として高部先生から被服構成学部会の発足時からの様々な取り組みについてお話いただきました。特に印象に残ったお話は、既製服が未発達だった時代から実施されていた人体計測の変遷についてです。これまでの部会員の先生方が質の高いデータベース構築のために努力を重ねられ、社会に貢献されていることを強く感じる事ができました。また、コンピュータを利用した自動計測が発展していく時代であっても、手計測の重要性を再確認することができました。

2日目の「婦人服向け裁断用ボディ開発の変遷」と「3Dボディスキャナと3D技術を活用したアパレル設計プロセス」では人体計測データとアパレルの製品づくりの関わりから、婦人服向け裁断用ボディ開発の変遷と三次元計測データをいかにアパレル設計に活用していかを紹介いただきました。株式会社キイヤの斉藤氏から新しいヌードボディ「spur-J」を紹介いただき、これは3次元計測・マルチン計測・写真撮影の計測データを分析し、日本人女性の美しい体型特徴を見つけ出し制作されたボディでした。開発の中で、3次元計測機でデータを採取するときに、計測ソフトは使用せずパターン設計に影響がある姿勢形状データとして取り扱ったボディは、数値だけではなく形と姿勢が特徴の今までにはない美しいフォルムでした。ビーエム・ディーシステム株式会社の佐藤氏からは、最新の3Dボディスキャンをご紹介いただきました。これからのアパレル設計において3D技術の活用は不可欠です。3D時代を迎え消費者がサイズへの満足度を高めていくことに期待し、今後の動向に注目していきたいと思います。

部会創立40周年の節目の年に参加させていただき充実した2日間となりました。また、たくさんの先生方とお話させていただき、教育現場についての意見交換もすることができました。懇親会では部会40年間の活動について懐かしい写真も交えながら紹介されました。今回のセミナーで学んだことを活かし、今後の教育と研究に励みたいと思います。

三次元計測データを用いた研究の取り組み

—高齢者の体型，動作および異体型の分析—

日本女子大学 武本 歩未

1. はじめに

近年，スポーツ衣料だけでなく日常着やフォーマルウェアにおいても人体の姿勢や動作を捉え，動作適合性が高い衣服設計が行われるようになった．現在，体型や姿勢，動作を捉える方法として，三次元計測が主流であるが，大学院在籍時からの約10年においても，三次元技術は更なる進化を遂げ，それらを用いた衣服設計はファッションアパレル業界においても再び注目され始めている．これまで私は，高齢者の体型・動作やプチサイズ，スポーツマンなどの異体型を三次元的に捉えることを核として研究を行ってきた．ここでは，三次元データを用いた研究の取り組みと今後の展望について述べる．

2. 研究紹介

2.1. 動的可動域を配慮した高齢者用下半身ボディ設計のための動作と体型の分析

本研究では，高齢者の下半身について，日常の主たる動作である歩行動作に着目し，高齢者の動作と体型について三次元動作解析，三次元計測を行ってデータを解析し，動的可動域を配慮した下半身ボディ設計のための基礎研究を行った．

三次元動作解析より，高齢者の歩行特徴として体幹の前傾，歩行速度の減少が認められた．また腕の振りが弱く，下肢に依存し，下腿の動きが小さく，蹴り出しの弱い歩行であること，その特徴は60歳代から70歳代にかけて顕著になることが示された．また，高齢女性29名の形状データを



図1. 標準形状

を用い，主成分分析を施し，サンプルスコアが0の仮想形状を導出し，これを平均的な高齢者のヌードボディとした(図1)．歩行時の動的可動域を検討するため，標準体型に近い体型特徴を持つ被験者3名の歩行姿勢時の左右側面投影図の重合図(図2)とヌードボディの側面図から，歩行姿勢を想定した標準的な側面形状(図3)を導出し，またヌードボディの寸法に近い被験者の歩行姿勢時の動的変化量を算出し，歩行姿勢を想定した下半身の各寸法を特定した．本研究では，歩行姿勢時の三次元人体計測を行ったものの，各部位の寸法計測に留まっているため，歩行姿勢時の人体形状データを相同モデル化し，平均的な歩行形状を導出し，三次元的に歩行姿勢時の動的変化量を捉える必要があると考えている．

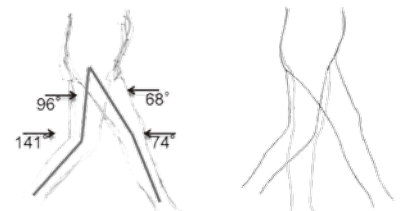


図2. 側面投影図の重合図 図3. 導出した側面形状

2.2. プチサイズの体型分析

本研究では，プチサイズ(以下Pサイズ)に着目し，身長によるサイズ区分を活用することの必要性を明らかにし，Pサイズの衣服の適合性を高めることを目的として，身長による体型特徴への影響について分析した．

Pサイズ100名の形状データを用い，平均形状を導出した．Rサイズ平均形状との比較から，Pサイズは胸部の厚みに対し，幅が小さく，体幹はメリハリがなく寸胴体型，頸部や肩部の大きさは標準的な体型であることが明らかとなった．両平均形状から作成したタイトフィットパターンの比較から，身長の相違はB.Lから上の背丈に多く現れ，またPサイズはかま幅はかま深に対して相



図4.PサイズとRサイズの
パターン重合図

対的に広いということが明らかとなった(図4)。これらは身長と相関しない体型特徴であると言える。今後は、このように身長との相関による単純な操作では補えない体型特徴を体系的にまとめ、Pサイズ体型により適合したグレーディングルールの導出に役立てたい。

2.3. ラグビープレイヤーの体型分析

本研究では、スポーツの中でもポジションによる体型差が大きいラグビー選手について、ポジション別の体型分析を行い、体型の相違を明らかにすることを目的とした。先行研究¹⁾では、代表的な選手の形状データの胸部・腋窩部断面図からセカンドロー・バックが類似した体型とし、フロントロー、セカンドロー・バックに区分されたことから、断面形状に着目し分析を行った。

大学ラグビー部所属の現役選手19名を対象に人体計測を行い、フロントロー2名、セカンドロー2名、サードロー2名、スリークォーターバック5名のそれぞれの形状データから平均的な形状を導出した(図5)。各形状の腋窩位と胸位の横断面重合の比較から、フロントローに比べ、セカンドローは腋窩位の胸部が発達し、立体的であり、差があることが示唆された。各形状から作成したタイトフィットパターンの比較より、フロントローのサイドパネルが特に大きく、前身頃のウエストのダーツ分量が多く、セカンドローはフロントローに比べ、前身頃のダーツ分量は少なく、前身頃、後身頃ともに胸部と胴部の身幅の差が少ないことが分かった。

今後は、被験者数を増やすこと、またプロ選手とアマチュア選手には、体格差があることも考慮しながら分析を進める必要がある。近年の健康志向の高まりにより、筋肉を鍛える人が多くなっているが、本研究の成果を日常着の設計に役立てることで、筋肉質な体型の人々の衣生活の質の向上を目指している。

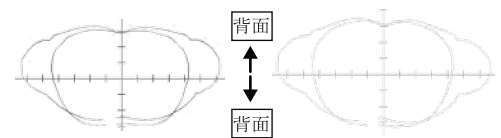


図5. 腋窩位、胸位の横断面重合図
(左:フロントロー 右:セカンドロー)

2.4. 三次元人体形状データの相同モデル作成方法の検討

これまでの研究方法で用いた三次元人体形状データの標準化(相同モデル化)、その統計処理は推奨される手法はあるが、ユーザー任意による部分があり、それにより相同モデルの作成結果や統計解析結果が異なる。本研究では、相同モデル形状、および作成方法の違いによる統計処理への影響について検討した。

全身形状の相同モデル群と全身形状から頭部、腕、下腿を削除した体幹部形状の相同モデル群のそれぞれ主成分分析結果の解釈から、全身形状の相同モデル群では腕の開き、頭部形状などの体形以外の要素が主成分因子に現れることによって、体形特徴が現れにくく、特に第2主成分以降の解釈に影響を与えることが分かった。また、データ点数が大小異なる2種のテンプレートを用い、それぞれ相同モデルを作成し、個々の三次元人体形状データと相同モデル2種との面間距離を計測した結果、データ点数の大きいテンプレートは、乳房の間や腋窩、鎖骨部分、下部胸囲など凹凸のある部位で再現性が高く相同モデル化されることが分かった。

以上は、基礎的な結果であるが、相同モデルを用いた研究を行うにあたり明確化する必要があり、体系的に捉えることで目的に応じた相同モデル化および人体形状データの統計処理が可能となると考えている。

3. 今後の展望

ISOでは、バーチャルフィッティングの精度評価の基準を設けるなどの動きがあり、世界的にアパレル3D-CADによる衣服生産はさらに普及すると考えられる。これらの研究を継続し、様々な体型の衣服を、精度高く設計するためのシステムの構築に寄与することを目指したい。

(参考文献) 1. 沼田喜四司, 中村寿, 石塚正行; ラグビー競技用ユニフォームの開発, 繊維製品消費科学 57(10), 742-744 (2016)

第19回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告

横浜国立大学 薩本 弥生

「全国中学生創造ものづくり教育フェア」は、中学生に競技会や作品展で、ものづくり学習の成果を発表し、受賞を目指して競い合うことを通じて、ものづくりの楽しさや興味関心を高めることを意図し、ものづくり教育の充実と発展、社会への理解・啓発を図ることを趣旨として開催されている。昨年度に引き続き今年度も、東京都葛飾区水元総合スポーツセンターで2018年1月26日、27日に開催された。

1日目は「豊かな生活を作るアイデアバッグ」コンクールが開催され、審査委員長として審査に関わった。全国から予選で勝ち抜いてきた16人の中学生の参加者たちが各々事前に提出した製作計画レポートに書かれた製作工程に基づき、布、型紙、材料を決められた予算の中で用意してを3時間半の決められた時間の中で家族や教員に見守られながら、生徒たちは無言で集中して黙々と製作していた。審査は4つの審査項目に基づき、厳正に行った。1事前の製作レポート、2製作の様子、3プレゼン、4作品の出来である。まず、製作レポートは、「豊かな生活を創る」をテーマに家族への思いがこもった作品が多く、製作工程のイラストも分かりやすく整理されていて、すてきな作品で、さすが予選を勝ち抜いた生徒たちだと感心させられた。本番の製作は一定の技術レベルが保たれていた。今年は大作に挑戦する生徒が多かったため、制限時間ぎりぎり完成する人が4、5名、完成できなかった人が1人いた。そのため、最後の10分位で焦って作品の完成時に若干ゆがみが生じた生徒もいて惜しくも賞を逃した。

防災やリメイクなどの衣生活の社会的ニーズや使う人のニーズを調べて、家庭科で育てたい課題解決的なコンセプトのものも多く見られた。

家族のニーズを知るためにコミュニケーションを取り、家族の絆が深まったという人もいた。ものづくりの過程で段取りを立てる能力や製作する力が求められ、大会で競い合う中で何度も修正を加えながら練習をする中で、成長されたと思われた。将来、参加者の何人かが家庭科の教員など、ものづくりの楽しさを伝える仕事についていただけたらと思った。



コンクールのプレゼンの様子



ティッシュボックスカバー体験コーナーには、2日間で約50名が参加した。見本作品に多くの方が興味を示し、中学生、付添の先生や親、兄弟など年代、性別を問わず体験され好評を得た。体験者は、出来上がり作品に大変満足した様子で、家や車の中で使おうという声が聞かれた。また、現場の先生からは、授業で扱う場合のポイントや必要時間数などの質問もあり、作り方パンフレットや布を持ち帰っていかれた。作品コンクール部門の作品も創造的なものも多く見られ、興味深かった。



体験コーナーの様子



作品コンクールの作品

平成 30 年度 研究動向（修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題）

「平成 30 年度修士論文テーマ」

「車いす利用者の衣服デザインのための座位寸法の推定」

井上 智子（指導：森下 あおい）滋賀県立大学大学院 人間文化科学研究科 生活文化学専攻

「クラスター分析による現代日本人成人女性の下半身の体型分類」

宮本 毬花（指導：大塚 美智子）日本女子大学大学院 家政学研究科 被服学専攻

「平成 30 年度 科学研究費補助金 研究課題」

基盤研究（B）

「着衣と人体生理状態を考慮した無線通信による熱中症予防支援システムの構築」

2015～2018 年度，研究代表者：横浜国立大学 薩本 弥生

「アパレルの国際競争力の強化を目指した 3D バーチャル工業用ボディの開発と性能評価」

2016～2019 年度，研究代表者：京都女子大学 渡邊 敬子

基盤研究（C）

「アパレル製品設計のための 50 代女性の 3D シミュレーションモデル開発に向けての研究」

2016～2018 年度，研究代表者：共立女子大学 丸田 直美

「布を用いた製作学習の学習効果を高める方策と支援」

2017～2019 年度，研究代表者：埼玉大学 川端 博子

「障害者の修正衣服ガイドライン作成に向けた更衣と座位姿勢に適したズボンの製作と評価」

2017～2019 年度，研究代表者：熊本大学 雙田 珠己

（（注）継続研究と部会員の皆様への呼びかけに対してお申し出頂いた分のみを掲載しました。）

会 務 報 告

1. 平成 30 年度会務報告

1) 事業報告

① 総 会

日時：平成 30 年 5 月 26 日（土）

場所：日本女子大学百年館 3 階 302 室

② 平成 30 年度家政学夏期セミナー

「ファッションビジネス戦略における身体サイズと衣料サイズの最新動向」

日時：平成 30 年 8 月 28 日（火）・29 日（水）

場所：文化学園大学

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 31 年 1 月 26 日（土）・27 日（日）

場所：葛飾区水元総合スポーツセンター

④ 研究例会

「日本の伝統文化 きものを考える」

日時：平成 31 年 3 月 11 日（月）

講演会：名古屋女子大学

見学会：有松見学、校友会館、SUZUSAN

2) 庶務報告

① 第 1 回運営委員会

日時：平成 30 年 5 月 26 日（土）

場所：日本女子大学 百年館 3 階 302

- (1) 平成 29 年度会計報告
- (2) 平成 29 年度会計監査報告
- (3) 平成 30 年度予算（案）について
- (4) 平成 30 年度夏期セミナー（案）について
- (5) 部会誌第 40 号編集案
- (6) その他

② 第 2 回運営委員会・夏期セミナー実行委員会

日時：平成 30 年 8 月 28 日（火）

場所：文化学園大学 A 館 6 階 A66b

合同委員会

- (1) 平成 30 年度夏期セミナー参加状況
- (2) セミナー進行上の確認
- (3) 懇親会の確認
- (4) その他

運営委員会

- (1) 平成 30 年度研究例会について
- (2) 部会誌 40 号編集案について
- (3) 平成 31 年度夏期セミナーについて
- (4) 科研の進捗状況報告
- (5) その他

③ 第 3 回運営委員会

日時：平成 31 年 3 月 11 日（月）

場所：名古屋女子大学

- (1) 当日の研究例会について
- (2) 部会誌について
- (3) 中学生創造ものづくり教育フェアへの支援
- (4) 平成 31 年度夏期セミナーについて
- (5) その他

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 平成 31 年度事業計画（案）

① 総会

日時：平成 31 年 5 月 25 日（土）

場所：四国大学

② 夏期セミナー

「地域から生まれる技と感性（仮題）」

日時：平成31年8月29日(木)・30日(金)

場所：滋賀県立大学

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成32年1月下旬

場所：葛飾区水元総合スポーツセンター(予定)

④ 研究例会

⑤ 部会誌41号の発行

⑥ ホームページの維持管理

⑦ その他

平成29年度被服構成学部会収支計算書

(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)

(単位：円)

科 目	予算	決算	備考
一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
①基本財産運用益			
特定資産運用益			
入会金			
年会費	420,000	422,500	部会年会費
会誌購読料			
大会等参加費	180,000	125,000	夏季合同セミナー懇親会
広告料			
刊行物売上			
著者負担金			
補助金			
一般寄付金			
特別寄付金			
雑収入	10	8	
②本部からの支部費			
本部からの支部活動活性化サポート費			
本部からの活動助成費	100,000	70,506	
経常収益計	700,010	618,014	
(2) 経常費用			
①事業費	653,000	444,729	
大会会場使用料			
大会講師謝金			
大会旅費交通費			
大会消耗品			
大会印刷費			
大会研究発表要旨集作成費			
大会通信運搬費			
大会臨時雇賃金			
総会費			
セミナー・講演会等会場使用料	50,000	12,750	研究例会
セミナー・講演会等講師謝金	100,000	55,000	研究例会
セミナー・講演会等旅費交通費			
セミナー・講演会等消耗品	180,000	133,188	夏季合同セミナー、研究例会
セミナー・講演会等印刷費			
セミナー・講演会等研究発表要旨集作成費			
セミナー・講演会等通信運搬費	20,000	850	
セミナー・講演会等臨時雇賃金			
学会誌等関連印刷費	100,000	94,962	部会誌
学会誌等関連通信費	25,000	0	
学会誌等関連原稿料・校閲料等			
学会誌等関連電子ジャーナル化費用			
研究補助費			
表彰費	23,000	23,940	ものづくりフェア
関連学会等会費	10,000	10,000	協賛金
会議費	50,000	45,671	運営委員会
広報費	35,000	34,784	HP契約・維持費
旅費交通費	50,000	31,980	
事務委託費			
支払負担金	5,000	1,604	
雑費	5,000	0	
②管理費	30,000	4,186	
給料手当			
福利厚生費			
旅費交通費			
通信運搬費	20,000	3,118	
備品費			
消耗品費	5,000	1,068	
光熱水料費			
雑費			
租税公課			
地代			
印刷費	5,000	0	
修繕費			
減価償却費			
リース料			
事務所管理費			
退職給与引当金繰入額			
③支部費			
支部活動活性化サポート費			
活動助成費			
経常費用計	683,000	448,915	
当期経常増減額	△ 17,010	△ 169,099	
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
(2) 経常外費用			
当期経常外増減額	0		
当期一般正味財産増減額	△ 17,010	△ 169,099	
一般正味財産期首残高	1,180,802	1,180,802	
一般正味財産期末残高	1,197,812	1,011,703	

貸借対照表

(平成30年3月31日現在)

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
手許現金	0	48	△ 48
普通預金 (三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	1,024,694	954,180	70,514
通常預金			
振替口座 (ゆうちょ銀行〇一九)	325,207	226,574	98,633
流動資産合計	1,349,901	1,180,802	169,099
2. 固定資産			
部会大会基金引当預金			
定期預金 (三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	0	0	0
通常貯金 (ゆうちょ銀行)	0	0	
固定資産合計	0	0	0
資産合計	1,349,901	1,180,802	169,099
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払い金			0
負債合計			0
III 正味財産の部			
正味財産			
1. 指定正味財産			
2. 一般正味財産	1,349,901	1,180,802	169,099
負債及び正味財産合計	1,349,901	1,180,802	169,099

監 査 報 告 書

一般社団法人 日本家政学会
会 長 石井 克枝 殿

私ども監事は、平成29年4月1日から平成30年3月31日までの平成29年度の部会の重要な会議に出席するほか、事業報告を聞き、重要な書類を閲覧し、主要な調査を行い、かつ当該事業年度に係る計算書類について監査を実施した結果、次のとおり報告します。


1. 事業報告は規程に従い、部会の状況を正しく示しているものと認めます。
2. 貸借対照表は平成29年度期末現在の財政状態を正しく示していると認めます。
3. 正味財産増減計算書は平成29年度の収支の状況を適正に表示していると認めます。
4. 役員の職務遂行に関する不正の行為または定款に違反する重大な事実は認められません。

以上

平成30年3月30日

一般社団法人 日本家政学会
(被監構成学) 部会

監事 鳴海多恵子 

監事 森 由紀 

平成30年度被服構成学部会収支予算書

(平成30年4月1日から平成31年3月31日まで)

(単位：円)

科目	30年度予算	29年度予算	増減	備考
一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
(1) 経常収益				
①基本財産運用益				
特定資産運用益				
入会金				
年会費	400,000	420,000	△ 20,000	部会費@4,000円×100名
会誌購読料				
大会等参加費	520,000	180,000	340,000	夏期セミナー参加費
広告料				
刊行物売上				
著者負担金				
補助金				
一般寄付金				
特別寄付金				
雑収入	8	10	△ 2	
②本部からの支部費				
本部からの支部活動活性化サポート費				
本部からの活動助成費	170,000	100,000	70,000	活動助成金
経常収益計	1,090,008	700,010	389,998	
(2) 経常費用				
①事業費	1,053,000	653,000	400,000	
大会会場使用料				
大会講師謝金				
大会旅費交通費				
大会消耗品				
大会印刷費				
大会研究発表要旨集作成費				
大会通信運搬費				
大会臨時雇賃金				
総会費				
セミナー・講演会等会場使用料	50,000	50,000	0	
セミナー・講演会等講師謝金	250,000	100,000	150,000	
セミナー・講演会等旅費交通費	100,000	0	100,000	
セミナー・講演会等消耗品	180,000	180,000	0	
セミナー・講演会等印刷費	30,000	0	30,000	
セミナー・講演会等研究発表要旨集作成費	90,000	0	90,000	
セミナー・講演会等通信運搬費	20,000	20,000	0	
セミナー・講演会等臨時雇賃金	20,000	0	20,000	
学会誌等関連印刷費	100,000	100,000	0	部会誌
学会誌等関連通信費	5,000	25,000	△ 20,000	
学会誌等関連原稿料・校閲料等				
学会誌等関連電子ジャーナル化費用				
研究補助費				
表彰費	25,000	23,000	2,000	
関連学会等会費	10,000	10,000	0	
会議費	50,000	50,000	0	
広報費	35,000	35,000	0	
旅費交通費	80,000	50,000	30,000	
事務委託費				
支払負担金	3,000	5,000	△ 2,000	
雑費	5,000	5,000	0	
②管理費	30,000	30,000	0	
給料手当				
福利厚生費				
旅費交通費				
通信運搬費	20,000	20,000	0	
備品費				
消耗品費	5,000	5,000	0	
光熱水料費				
雑費				
租税公課				
地代				
印刷費	5,000	5,000	0	
修繕費				
減価償却費				
リース料				
事務所管理費				
退職給与引当金繰入額				
③支部費				
支部活動活性化サポート費				
活動助成費				
経常費用計	1,083,000	683,000	400,000	
当期経常増減額	7,008	17,010	△ 10,002	
2. 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
(2) 経常外費用				
当期経常外増減額		0		
当期一般正味財産増減額	7,008	17,010	△ 10,002	
一般正味財産期首残高	1,349,901	1,180,802	169,099	
一般正味財産期末残高	1,356,909	1,197,812	159,097	

お 知 ら せ

1. 部会費について

平成 31 年度の被服構成学部会費（正会員：4000 円，学生会員：2500 円）は，5 月中に下記郵便払込み口座にご送金くださいますようお願い申し上げます。また，過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので，併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部会

なお，会費に関するお問い合わせは，下記にお願いいたします。

〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1
東京家政大学 服飾美術学科 大塚有里 宛
TEL・FAX：03-3961-8394
E-mail：otsuka@tokyo-kasei.ac.jp

2. 入退会，住所変更等について

お届け，お問合せは，下記にお願いいたします。

〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1
東京家政大学 服飾美術学科 田中早苗 宛
TEL・FAX：03-3961-9002
E-mail：stanaka@tokyo-kasei.ac.jp

※ 入会申込書および変更届，退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※ なお，退会届につきましては（一社）日本家政学会の退会手続きとは別処理になっておりますので，部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は，平成 31 年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には，なるべくすみやかにお知らせくださいますようよろしくお願い申し上げます。

ご案内 2019年度 夏期セミナー 予告

滋賀県立大学・森下あおい

テーマ：「地域から生まれる技と感性（仮題）」

会場：滋賀県立大学：(〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 番地)

日時：2019年8月29日（木）13:30～17:30 講演
18:00～ 懇親会
8月30日（金）9:30～16:00 見学会（バスを予定）
解散（JR 米原駅を予定）

概要：

今年の夏期セミナーは2日間の日程で滋賀県にて開催します。湖国と呼ばれる滋賀県は自然環境に恵まれ、消費地である京都に隣接したことからも、感性豊かな繊維製品が多数作られてきました。特に多種多様な特徴を持つ天然繊維の「ちぢみ」の素材産地は、琵琶湖を取り巻く広い地域に築かれています。

今回の夏期セミナーでは、地域の企業や技術研究機関、ものづくりを継承する伝統産業会館から講師をお招きして、産地の織物特性や生産工程を紹介していただくほか、変化するライフスタイルのなか、現代の新しいものづくりに向けて、どのような取り組みが行われているのかをご講演いただきます。

まず1日目の講義では、滋賀県の繊維が発達した背景と、綿、絹、麻の各ちぢみ織物の特徴についての基調講演をはじめに、古い集落が残る湖北地域から長浜産地の「絹ちりめん」や「和楽器（琴や三味線）の絹弦」製造についての内容を予定しています。

2日目の見学会では、近江の織物を全国に広めた近江商人の町、湖東地域の愛知川町「近江上布伝統産業会館」にて、伝統技法の紹介や海外発信されているテキスタイルデザインなどをご覧いただきます。また長閑な集落の残る湖北地域の木之本町へ足を延ばし、美しい音色の絹弦を国内だけでなく、海外にも提供している企業の見学を予定しています。

地域に根差したものづくりの現場を、この機会に是非訪れていただきますようお願いしています。

※詳細が決まり次第ホームページでお知らせいたします。

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会規約

第1条（名 称） 本会は、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。

第2条（目 的） 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。

第3条（事 業） 本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1 総会を開催する。
- 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
- 3 部会誌を発行する。
- 4 その他の必要な事業を行う。

第4条（会 員） 本会の会員は、次のとおりとする。

- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する、原則として一般社団法人日本家政学会会員で、本会の目的に賛同して入会した個人。
- 2 学生会員 本会の目的に賛同して入会した学生。
- 3 名誉会員 元部会長、または、特に本会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。

第5条（会 費） 会員は年会費を納入する。

- 1 年会費は次のとおりとする。
正会員 4,000円
学生会員 2,500円
- 2 名誉会員は会費を納めることを要しない。

第6条（入 会） 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。

第7条（退 会） 会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。この場合、既納の会費は返却しない。また、継続して2年間会費を滞納した場合は、原則として退会したものとみなす。

第8条（役 員） 本会に次の役員をおく。

- 部会長 1名
- 副部会長 2名
- 運営委員 若干名
- 監 事 2名

第9条（役員を選任） 役員を選任は、次のとおりとする。

- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会で選任する。部会長の選任および解任は、理事会の承認を受けるものとする。
- 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。

第10条（役員任期）

- 1 役員任期は2年とし、再任を妨げない。
- 2 役員再任については、申し合わせを別に定める。

第11条（役員職務） 役員職務は次のとおりとする。

- 1 部長は本会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、理事会に報告する。
- 2 副部長は部長を補佐し、必要な場合には部長の職務を代行する。
- 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
- 4 監事は本会の会計監査を行う。

第12条（役員解任） 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議する。

- 1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき。
- 2 職務上の義務の違反、その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき。

第13条（会計） 本会の会計は次のとおりとする。

- 1 経費は会費、その他をもってまかなう。
- 2 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月末日に終了する。

第14条（規約の改廃） 本規約の改廃は総会において承認を受け、理事会に報告する。

以上

附 則

- 1 施行に関する内規は別に定めることができる。
- 2 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする。
- 3 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする。
- 4 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする。
- 5 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成15年8月27日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 6 この規約の施行は平成15年8月27日からとする。
- 7 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。
- 8 この会則の施行は平成18年8月22日からとする。
- 9 社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき、平成22年5月29日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 10 この規約の一部改正の施行は平成22年5月29日からとする。
- 11 この規約の一部改正の施行は平成24年5月12日からとする。
- 12 この規約の一部改正の施行は平成28年3月14日からとする。
- 13 この規約の一部改正の施行は平成28年5月28日からとする。
- 14 この規約の一部改正の施行は平成30年2月27日からとする。

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務、会計、企画、広報、編集担当をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事は役員会に同席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。
- 6 申し合わせの改廃 運営委員会の議を経て、総会で承認し、理事会に報告する。

附則

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この申し合わせの一部改正施行は、平成18年8月22日からとする。
- 3 この申し合わせの一部改正施行は、平成24年5月12日からとする。

平成 30・31 年度役員

部会長	川端 博子	埼玉大学
副部会長	渡部 旬子	文化学園大学 短期大学部
	森下 あおい	滋賀県立大学
運営委員		
(庶務)	田中 早苗	東京家政大学
	石垣 理子	昭和女子大学
	土肥 麻佐子	文教大学
(会計)	大塚 有里	東京家政大学
	井口 彰子	文化学園大学 短期大学部
(企画)	薩本 弥生	横浜国立大学
	原田 妙子	名古屋女子大学 短期大学部
	渡邊 敬子	京都女子大学
(広報)	伊藤 海織	金城学院大学
	工藤 寧子	東北女子大学
(編集)	小田 久美子	名古屋女子大学 短期大学部
	角田 千枝	相模女子大学
	末弘 由佳理	武庫川女子大学
(監事)	森 由紀	甲南女子大学
	大塚 美智子	日本女子大学

事務局 〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学 教育学部生活創造専修 家庭科
TEL : 048-858-9151
E-mail : kawabata@mail.saitama-u-ac.jp

(一社)日本家政学会 被服構成学部会入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦	年生	性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL:<http://h-kohsei.com>

編集後記

記念すべき第40号発刊にあたり、今期の活動内容と共に40周年記念特集を掲載することができました。特に、本部会を牽引して下さいました元部会長の先生方からのメッセージには、部会の歴史と今後の発展を示唆して下さいました内容が詰まっており、身の引き締まる思いが致しました。このように、これまでの礎により現在の活動が築かれていることを改めて確認させて頂ける意味深い号として完成できましたのも、ご執筆下さいました皆様のお蔭と心より感謝しております。今後ともお力添えの程、何卒宜しくお願い致します。

(角田)

本部会誌の原稿執筆にご協力頂きましたことに心より感謝申し上げます。お忙しい最中、先生方のご尽力のおかげで、40号をお手元にお届けすることができました。本誌の編集作業に微力ながら携わらせて頂きました立場として、先生方のご功績は勿論のこと、被服構成学の面白さ・楽しさを改めて感じることができました。この場を借りて御礼申し上げます。今後ともご協力頂けますよう宜しくお願い申し上げます。

(末弘)

平成31年3月31日発行

発行：(一社)日本家政学会 被服構成学部会

印刷：株式会社アデイス

TEL：078-265-6336

